

ひきこもり男の回顧 録

現代のひきこもり・ニート
について考える

もちろんだひろ



目次

序説	1
幼少期	4
保育園・小学生時代	7
中学時代	9
高校時代	13
高校時代 パート2	19
大学時代	22
裁判所時代	28
ひきこもり時代	37
警備員時代	45
ニート時代	47
司法試験受験時代	50
精神病院入院	51
県外の父親のマンション時代	52
精神障害者施設入所	55
仕事探し	58
今日に至るまで	60
まとめ ひきこもり等について思うこと	62
近況	64
奥付	

序説

みなさんに、私という人間を、どこからお話すればよいのでしょうか。私は、とある田舎の町に生まれ、育ちました。家も、なんということはない、ごく普通の、田舎の一般家庭でした。ほのぼのとした田舎の、ほのぼのとした家庭です。両親共働きで、ばあちゃん、曾ばあちゃんに面倒を見てもらった、ただの、田舎の子供でした。まあ、子供のころから、真面目で、田舎の子としては、出来のいい子。まあ、俗に言う、「いい子」だったわけです。

何をするにも、親や、先生の言うことにしたがって、今思えば、かなりの無理難題もこなして、周りの期待を裏切らない、優等生でした。

三つ下に、妹がいるのですが、彼女は私とはまったく逆の性格で、わが道を行く、というタイプですねえ。要領がいいというか、図太いと言うか。まあ、私からみれば、うらやましい性格なんですねえ。私が、妹のように図太かったら、さぞかし出世しているだろうと思ったものです。でもまあ、そういうわけでもないんでしょうけどね。

それにしても私は、周りの人にどう思われるか、よく思われたいなどと、どうでもいいことに神経をすり減らしておったわけなんです。今考えると、馬鹿馬鹿しいんですけどね。

それでも、大学時代までは、まあ、なんとかなるわけなんです。そこそこ勉強ができて、友達とわいわいやっていれば、自分はいまよくやっている、あるいは、自分はエリートだ、天才だ、などと、たわけた幻想を抱いていられるわけです。

でも、一歩社会に出てみれば、そうは問屋がおろさない。あっという間に、ぼこぼこにされて、自信喪失、廃人みたくなるわけなんですわあ。

思い返すに、子供のころから私は、決して、子供らしい子供ではなかった、と思ひ増すねえ。とにかく、いい子、でなければならないという、一種の強迫観念のようなものがあつた気がします。まあ、それは今でもですけど。(笑)

小学校時代は、優等生だが、すぐに切れて暴力的になる。中学時代は、国立の付属中学校に行って、いじめにあい、卑屈になつてゐた。高校時代は、その反動でからか、奇人変人ぶつたり、喧嘩に強くなりたいと思つて(いじめられないため)体を鍛えたり、異常なまでに勉強してみたりと、中学時代のいじめの記憶を、なんとかして消し去つてしまひたかつたんでしょねえ。

それから高校を卒業して、東京の大学に行ってからは、ずいぶんと私も変わったと思ひますねえ。東京の一流大学に合格して、東京に住んでゐる。まあ、自分が、エリートの都会人になつたと思ひ、勘違いの優越感にひたつてゐたんでしょねえ。

しかし、それは本当の意味で自信がついたというのとは、ちょっと、いや、全く違つてゐました。一流大学に合格したということで、自分の劣等感から目をそらすことが出来て、東京に出たということで、過去のしがらみを断ち切ろうとした、断ち切つたつもりでゐた。そんなところでしょうねえ。自己欺瞞とでもいうんでしょか。だから、大学時代、一見自信があるようにみえて、いや、自信があるように虚勢を張つて、本当のところは、全く自分に自信がなかつたんですよ。

学生時代までは、自分の弱さから目をそらし、自分は強いのだと思ひ込もうとしてゐました。それでも、学生時代までは、なんとかごまかしが効きますが、社会に出たら、自分の弱さと向き合わざるを得なくなります。私の場合は、就職してから、人間関係の厳しさに耐えられず、自分の弱さを突きつけられました。そして、引きこもり、ニートへと突き進んでゆきました。

あらためて思うに、幼少時の体験、家庭環境(親子関係)、イジメられた記憶、などというものは、後々まで尾を引くことになるものだあな、と、感慨深く思ひます。次章より、私の人生を、時系列で簡単にまとめました。素人なので、文章が下手な上に、支離滅裂なことを書いてゐるかもしれませんが、ご了承ください。いま、ひきこもりや、イジメなどで悩んでおられる方がおられれば、何かの参考にはなると思ひます。まあ、まったく参考にならないかもしれませんが。

さあ、私の人生をご覧ください。

幼少期

ここで、あらためて、私の幼少期に話を戻したいと思います。当初浮きの体験、記憶が重要な意味を持っているのではないかと、まあ、私は考えているのですよ。

まず、私の家族の紹介から始めましょう。今は亡き曾ばあちゃん（ひたすら私を愛してくれた）、ばあちゃん（ものすごく厳しかった）、母（真面目で控えめな田舎の女性）、父（昔気質の、典型的九州男児）、妹（しっかりもの）。

これらの人々が私の家族です。祖父は戦死しており、母が一人っ子だったため、父が婿養子に来たというわけです。

私が物心ついたころは、愛と幸せに満ちておりました。少なくとも私は、そう感じておりました。その一番の理由は、曾ばあちゃんの存在だったと思います。もちろん、父も母も。私を愛してくれていましたが、両親共働きということもあって、私の面倒はすべて、曾ばあちゃんがみてくれておりました。曾ばあちゃんは、私が何をしても、そのすべてを受け入れ、私に、限りない愛を注ぎ込んでくれました。今でも、曾ばあちゃんには感謝しておりますし、あの頃のことが懐かしく思い出されます。

しかし、私が4歳くらいの頃、曾ばあちゃんは亡くなりました。それを機に、私を取り巻く環境が一変してしまいました。

それまで、私の面倒を見ていた曾ばあちゃんが亡くなったので、かわりに、ばあちゃんが私の面倒を見ることになったのです。穏やかで優しくあった曾ばあちゃんとは違って、ばあちゃんは、気性が荒く、乱暴な面がありました。

少しでもばあちゃんの気に障ることをすると、びんたされるのは当たり前でした。両親のいないときに、縁側から外に投げられたことも一度や二度ではありませんでした。

ある晩なんぞは、夜中に、縄で電柱に縛り付けられました。今考えても、さすがにこれは常軌を逸していると言わざるを得ないでしょう。

まあ、そういうことで、幼い頃の私は、毎日、生きた心地がしなかったんですよ。武士道とは死ぬこととみつけたり。この頃すでに私は、人生を悟っていた、のかなあ。

実際、毎日が、生きるか死ぬかのサバイバルのように思っていました。世間では、よく、「孫は目の中に入れても痛くないほどかわいい」、とかなんとか戯けたことを言っておりましたが、私には何のことだかさっぱりわかりませんでした。

いつかばあさんに殺されるかもしれない、と思っていたし、私も、いつかばあさんを殺そうと真剣に考えていたような記憶があります。まあ、心の広い考え方をすれば、ばあさんは、私に世間の厳しさを教えて、強く育てようと思っていたのかもしれない。まあ、そんなことは絶対はないと思いますけどね、てへへ。

こんなことを書くと、うちの祖母が異常者のように思われ、その祖母に育てられた私もまた異常者だと思われると困りますから、念のために言っておきますが、ちょっと大袈裟に面白おかしく書いたまでですよ。

祖父が戦死したので、ばあちゃんは、一家の大黒柱として、戦後を生き抜いてきたのです。畑を耕し、蚕を飼い、工事現場で働き、とにかく働いて働いて、一人娘である私の母を育てたのです。相当つらいこともあったでしょう。私には想像もつきません。だから、祖母が厳しかったのも、当然と言えば当然なんですよ。それに、厳しいだけじゃなく、とっても優しいんですよ。やっぱり、孫はかわいいんですかねえ。また、ばあちゃんは、正直で、勇敢なんです。そんなところは、私、すごく尊敬します。

実は、ばあちゃんは、私の命の恩人なんですよ。幼い頃、友達と遊んでいたら、どうしたはずみか、古井戸に落ちこちちゃったんですよ。そして、溺れかかっていたら、ばあちゃんと、親戚のおばさんがやってきて、私を井戸から救い上げてくれたんですよ。あのときのことは、今でも鮮明に憶えています。あの時のばあちゃんの手は、とっても力強く、あったかかったなあ。あの時、ばあちゃんたちが来てくれなかったら、私は今存在してないことになりますね。そういうわけで、ばあちゃんは、私の命の恩人なんですよ。

とはいえ、振り返ってみれば、この頃のことがトラウマになっているのかもしれないね。曾ばあちゃんが亡くなって以降、私には甘えることが出来なかったのです。一番甘えたい幼少期に甘えることが出来なかった……。それから、40代になった今まで、誰かに甘えたという記憶はないですねえ。人に（家族にすら）甘えることが出来なくなったのですね。それは、祖母の暴力に対する恐怖心からなのか……。

その割には、大人になってから（まあ、本当の意味では大人ではないんですけど、おっさんなのに子供、と言った感じですね。俗に言うアダルトチルドレンというやつですね。信頼している精神科医の先生からそういわれました。）

「お前は甘えてる、もっとしっかりしろ！」

「社会はお前が考えてるような甘いもんじゃないんだ！」

などと、甘えてる、甘えてると連呼されますが……。甘えたことがないから、甘えるってどういうことかもわからないんですけどねえ。確か、テレビで精神科医か教育評論家か脳科学者が、

「子供の頃、親や家族に甘えられなかった子供は、大人になってから、甘ったれになる！」
といていたのを耳にしたことがあります、なるほどそのとおりだと思います。

保育園・小学生時代

子育てがひと段落ついた母は、再び勤めに出ることになりました。それで私は保育園に行くことになりました。私はその頃、同年代の子供に比べると、図体だけはでかかったのですが、気が小さい泣き虫でした。近所の子供たちと遊んでいても、いつも泣かされていました。だから、近所の子供が私を遊びに誘いにくる度、曾ばあちゃんは（存命中の話）、

「おまえは、どうせ泣かされるんだから遊びにはいくな。」と、私を引き止めました。

かわいい自分のひ孫が、よその子供たちにいじめられるのが、忍びなかったのでしょうか。しかし私は、懲りもせずに遊びに行っていました。そして、結局は、また泣かされていたんですけどね。幼い頃って、そんな感じでしたね。

保育園でも、おんなじ様な感じでしたねえ。他の子よりも大きいのに、泣かされてばかりいました。年上の子にはもちろんのこと、気の強い年下の子にまで泣かされていました。それでも、保育園は大好きで、毎日行ってましたねえ。いったい何が楽しかったんでしょうね？ いまでも謎です。

そして、小学生になると、少し、いやかなり事情が違ってきました。小学生離れした巨体だった私は、自分は他の子よりも力が強いということに気づきました。今考えても、子供とは思えないほどの腕力がありました。それで、気に食わないことがあると、癩癩を起こして、他の子をぶん殴っていました。今考えても、なぜあの頃、私があんなにまで暴力的だったのかは、世界の七不思議のようなものです。三つ年下の妹に対しても、ぶん殴ったり、プロレス技をかけたりにして、かなり暴力的でした。

それでも不思議なことに、私は、優等生のいい子で通っていましたねえ。やっぱり、勉強が出来て（私は小学生の頃は、よく勉強が出来たので、自分は天才だと思っていた。）、学校の成績がよかったからですかねえ。まるで、天下御免の向こう傷の、早乙女もんどのすけのようでした。まあ、それは言いすぎですけどね。

中学時代

しかし、勉強が出来たことは、いいことばかりをもたらしたのではありませんでした。何を勘違いしたのか、うちのバカ親が、私に中学受験をさせたのです。まさに、青天の霹靂。田舎の小学校で成績がいいからといって、いい気になったらだめだ。という、両親のバカ親的わがままで、市内の国立大学の附属中学を受けろと言いつけたのです。

今だったら、まあ、親を殴り殺すところですが、当時は私も小学生でだったので、親の言いなりになるしかありませんでした。このことは、今でも恨みに思うこともあります。低学歴で、たいした仕事もしてない親が、自分たちの劣等感をなんとか解消しようとして、当時、学業優秀だった私を利用した。それがほんとのところだったと思います。(まあ、本当に私のことを思っていたことだったかもしれませんけど。)

中学受験はうまくいきました。(まあ、うまくいかないほうがよかったんですけどね。)しかし、田舎の公立小学校からきた私は、市内の国立大学附属中学に入学したものの、はっきり言ってなじみませんでした。

その上、イジメの標的にされてしまったのです。知っている友達もおらず、田舎から来た(まあ、その町も東京からみたら、はっきり言ってど田舎なんですけど)デブのわたしは、イジメの格好の標的だったんでしょねえ。まさに、飛んで火にいる夏の虫、と言ったところでしょうか。わざわざ、国立大学附属中学に入学したことを後悔しましたねえ。だって、イジメられるために入学したようなもんですから。毎日、バスで一時間もかけて通っていましたよ。いじめられるために。

しかし、親を恨むのは、やっぱり筋違いだろう。親としては、わが子を少しでもいい学校に入学させて、将来、大人になってからより良い人生を歩ませたいと思う。それが親心というものだろう。(まあ、私には子供がないので、本当のところはわからないのだが)それを、子供心になんとか感じていたから、いじめられていることを、親には話せなかった。私は、手のかからない、親の期待にこたえる優等生を演じていたかったのだ。それが正しいことなのかどうか、私には解からない。しかし、似たような経験をした人、あるいは、今そういう経験をしている人も少なからずいると思う。

いま、イジメで苦しんでいる人は、恥ずかしい等と思わずに、親に相談するべきだと思う。親は強い。私は、両親のことを、バカ親など書いたりしたが、あくまでも愛をこめでの表現である。親は、我が子のためだったら何でもする。私も、四十数年の人生の中で、幾度となく親に助けられてきた。本当に感謝している。喧嘩したり、言いたいことを言い合ったりするが、それは、親子だからである。苦しいときは、親に相談しよう。そうすれば、解決の糸口が見つかるに違いない。

それと、私が中学生の頃から、イジメによる自殺が増えました。これは悲しいことです。前途洋々たる人生が、まだ始まったばかりなのに、自ら命を絶つのは本当に悲しいことです。私は、自殺するくらいだったら、学校になんて行かなくていいと思います。学校に行かなくても、勉強するところはたくさんあるでしょう。いま、イジメなどで悩んでいる人は、ぜひとも、ご両親にすべてを打ち明けてください。自分の、苦しい胸の内を話してしまうのです。そうすれば、ご両親も理解してくださるでしょう。そして、適切な解決策が見つかることでしょう。また、悩みというものは、誰かに話すだけで、その半分は解決したも同じことです。

私は、残念ながら、両親には相談できませんでした。しかし、両親がいるだけで、なんとかイジメに耐え抜くことができました。でも、両親に相談していれば、なにかいい解決策があったと思うのです。親は、子供が本気で助けを求めたら、何をしてでも助けてくれます。あんまり、親を甘く見ないで、信頼しましょう。きっと、あなたの信頼に応えてくれます。

もし、現在、ご両親のおられない方は、身近にいる大人に相談してください。公的施設でもいい、とにかく、信頼できる大人に相談することです。それが、イジメ解決への第一歩です。

まあ、虐められてはいましたが、嫌なことばかりではありませんでした。一応は、自分なりに楽しみがあったんですよ。

中学時代に興味があったのは、当時はやっていたゲームウォッチ、プロになりたいとまで思ったカメラ（当時はまだデジカメはなかったので、フィルムカメラ）、あとは部活の剣道、それと読書でした。やはり、武道と読書はするべきだとおもいますね。私がイジメに耐えることができたのは剣道のおかげだと思います。武道は、体を鍛えると同時に、

こころも鍛えられます。イジメられている人は、何か武道を習うことも一つの方法だと思います。

また、読書もおすすめですね。空想の世界に浸って、ストレスを解消することができますから。(まあ、空想と現実の区別がなくなると、ちょっとやばいですけど)それに、読書の習慣のある人となない人とは、十年に十年経つと、知識・教養の差が如実に顕れますからね。少年時代から、読書の習慣を身につけておけば、いつか役に立つ日が来ることは間違いありません。

私が中学時代にもっとも読んだのは、星新一、筒井康隆両先生のご本です。私がもっとも尊敬し、影響を受けた大作家だと思います。とにかくすばらしい作品ばかりです。このお二人の先生の作品を拝読していると、その作品の中に完全に入り込むことができました。それは、イジメに悩んでいる、陰気な変態中学生にとっては、格好の現実逃避手段でした。なんとか、自殺せずに正気を保って、中学三年間を生き抜くことができたのは、ひとえに、両先生のおかげであります。

ほかの誰にも真似することのできないすばらしい世界観。期待を裏切らない、奇想天外なストーリー展開と、感動的エンディング。この両先生のご本を読まないで、絶対、人生損します。

少し話がそれますが、私が大人になってから知り合った人に、いじめられるほうが悪い、といった方がいました。いじめられたら、やりかえせばいい、家から包丁でも持ってきて暴ればいじめられなくなるってしていました。その方は、自分が中学時代いじめっ子だったことを自慢するかのようには話していました。いじめっ子がいじめやすいのは、いじめられてもおとなしくしてる人だそうです。いじめられて、おこって取っ組み合いでもするような人は、面倒だからいじめないってしていました。なるほど、そうなのかもしれません。しかし、本当にそれは正しいことなのでしょうか。いじめられたら戦えばいい、という人は他にも大勢いますが、そういう人はいじめがどんなものか知っているのでしょうか。一対一だったら、それは喧嘩で、いじめではありません。いじめとは、大勢で、一人あるいは少数者をくるしめるものです。一人で、10人20人を相手に、喧嘩できる人がどれほどいるのでしょうか。また、刃物などを振り回したら、確かに、いじめはなくなるでしょう。しかし、それは人として正しいことだとは思えません。それでは、ただの犯罪者になってしまいます。

以上のようなことを述べたのは、これだけ、いじめや、それに伴う自殺が増えているの

にもかかわらず、いい歳をした大人が、いじまれるほうが悪い、とか、包丁もって暴れる、などと、無責任で、現実をまったく認識していないということに、危惧を感じたからです。そんな人は、自分が大勢の人からいじめられてみれば解ると思うんですけどね。自分がそんな立場になったときに、本当に戦えるのかどうか。大人の世界にだって、ちゃんといじめはありますからね。

私は、いじめられたら、逃げます。そして、いじめられている人にも、逃げることをお勧めします。逃げることは恥ずかしいことではありません。一人で大勢を相手に、敢えて不利な戦いを挑む必要はありません。兵法でも「三十六計、逃げるに如かず」といいますからね。逃げるのが、戦いにおいては、最善の策だということです。また、体制を整えて、挽回すればよいのです。

高校時代

そんなこんなで、イジメ地獄の中学三年間を、何とか自殺せず、登校拒否（当時は不登校のことをそうよんでいた）にもならず、なんとかクリアすることができた。中学を卒業さえすれば、高校など、どこに行っても良かった。結局、出来たばかりの県立高校へ行くことになった。

言わなくてもわかってもらえると思うが、高校では絶対にイジメにあわないようにしようと神に誓った。もし、私に危害を加える奴がいたら、そいつを殺すことになったとしてもだ。入学したてのころは（この頃が一番大事だと思うのだが）、ちょっとでもからかわれようものなら、そいつを、おもいきりぶん殴ったり、跳び蹴りをかませたりしていた。それがいいことかどうかわからないが、イジメられないため、なめられないため必死だった。

そして、とにかく体を鍛えた。もともと体格の良かった私だが、太っていたことをコンプレックスに感じていたので、体を引き締めるため、また、喧嘩になった時のために腕力をつけようとしていた。とにかく、喧嘩に強くなりたかった。そうすれば、イジメられることはないだろうと信じていたからである。中学時代にイジメられたわたしがそう思うのも、まあ、当然のことだろう。

幸いなことに、高校時代はイジメにあうことなくすんだ。しかし、心底こころを許したと言うわけではなかったように感じる。どこか、心を開いておらず、何者かを演じているような気がしていた。クラスメイトには恵まれていたのがだ、中学時代にイジメられたことが、トラウマのようになっており、素直になること、人を信じるのが怖かったのだろうと思う。

それでも、高校時代は、中学時代に比べるとはるかに楽しかった。友達と、映画を観に行ったり、車やバイクの話で盛り上がりたりもした。その頃の私の最大な関心事は、車とバイクだった。とにかく、早く高校を卒業して、車やバイクに乗りたかった。

スポーツカー全盛期の当時、乗りたかったのは、トヨタのセリカ XX、いすゞのピアッツア、日産のフェアレディ Z。

また、当時は空前のバイクブームだった。しかも、レーザーレプリカが大人気だった。スズキのΓ（ガンマ）、ヤマハの FZR、ホンダの VFR など、挙げたらきりが無い。私が一番憧れたのは、レーザーレプリカではないが、カワサキの GPZ だった。他には、スズキの刀。どれも魅力的なバイクだった。これらは、程度のいい中古を何とか探して乗ってみたい。

私は、車の免許は高校卒業後すぐにとったが（まあ、最初は完璧にペーパードライバーだったが）、バイクの免許をとったのは 38 歳のときだった。とにかく、バイクに乗りたくてたまらなかったので、仕事をやめて免許を取りにいった。そして、12 万くらいで、中古のクラブマンを買って、しばらくは、仕事もせずにバイクに乗りまくっていた。青春時代に出来なかったことは、後になってやりたくなるものなのだ。

当時は、カー雑誌、バイク雑誌を読んで想像を膨らませるのが何よりの楽しみだった。今みたいに、パソコンやスマホ、ゲーム機は持ってなかった。当時はそんなものは無かった。まあ、ファミコンは持ってる奴もいたが、私は買えなかった。パソコンも当時すでに、ある程度は普及していたと思うのだが、その頃はまだ、マニアのためのもので、私は、コンピュータやパソコンと聞くと、何か仕事のための道具のように思っていた。まだ、そんな時代だった。

中学時代と同様、高校生になってからも、読書は最大の楽しみの一つだった。高校時代、一番没頭して読んだのが、今をときめく、村上春樹先生の著書だった。最初は、友人の勧めで、何気なく読んだ。最初に読んだのが、「1973年のピンボール」だった。それは、私がそれまで読んだことのない雰囲気の小説だった。それをきっかけに、村上春樹ワールドに、どっぷりと浸ることになった。最初、「1973年のピンボール」と、「風の歌を聴け」を読んだときは、当時の私の心境にマッチした、ほろろがい青春小説というような感じで読んでいた。しかし、「羊をめぐる冒険」を読んでからは、ただの青春小説ではないな、と感じ始めた。それから、村上春樹先生の御本を、次から次に読んでいくことになった。

当時の私は、村上春樹先生の小説の主人公のようになりたかった。タフでクールに。おしゃれで、都会的な生き方に憧れていたそのころ、村上春樹先生の御本に出会ったことは、私に大きな影響を与えたと思われる。（まあ、私は、おしゃれにも、都会的にもなれ

なかったが。)

また、高校時代になると、音楽の趣向が変わってきた。中学時代まではアイドルのヒット曲やアニソンくらいしか聴かなかった。

しかし、ある日、妹が、大滝詠一なるひとの「イーチタイム」のカセット（若い人は知らないかも）を借りてきたのだ。それでも、最初は聴く気になれなかった。大滝詠一などという名前は聞いたことがなかった（実際には超大物で、有名だったのだが、当時の私は知らなかった。）からだ。しかしそのうち、暇なときになんとなく聴いてみた。そして、人生観が変わるくらいの衝撃を受けた。それは、私が、それまで聴いたことのない、素晴らしいサウンドだった。そのときの衝撃は忘れもしない。

しかし、そのカセットは、妹が友達から借りてきていたものだったので、当然ながら返さなければならない。数日後、妹がそのカセットを持ち主に返した。しかし、そのカセットのサウンドが忘れられなかった。特に耳に残っていた曲が「夏のペーパーバック」のサビの部分だった。

歌手名も、アルバムタイトルも憶えていなかった私は、妹に、あのカセットのアーティスト名とアルバムタイトルを、友達に聞いてきて貰った。そしてそのとき、大滝詠一の「イーチタイム」であると認識した。それで、早速買おうと思ったのだが、そんなアルバムが田舎のレコード屋にあるかどうか心配だった。しかし、何はともあれ、とりあえずレコード屋へと向かった。

そして、レコード屋で探す・・・そして・・・あ、あ、あった！ しかも何枚もあった。（まあ、あって当たり前なのだが。）もちろん、「イーチタイム」もあった。あの時の感動をどうすれば表現できると言うのか、いや、出来ない。私は、とにもかくにも、「イーチタイム」をひつかんで、それと、「ロングバケーション」もひつかんで（タイトルとアルバムジャケットからして、おしゃれで、いいアルバムだと直覚したからだ。）、興奮しながら、お金を払った。

そして私は、我が愛車ランディオーネ号（たしか、そういう名前の自転車だった。）を、中野浩一ばりのスピードで（たしか、中野浩一がCMキャラクターだった。）（中野浩一と言っても、若い人には知らない人もいるかもしれないので説明しておく、1980年代に活躍した競輪選手で、たしかそのころ9連覇くらいしていたすごい人である。）自

宅まで飛ばした。時空を超えてしまいそうな勢いだった。

家に着いた私は、神業ともいえるスピードで、トリオ（そういうメーカーがあった。）のステレオで「イチタイム」をかけた。「これだ、これが俺の求めていたサウンドだ」と、歓喜の涙を流しながら最後まで聴いた。

それから、二枚のアルバムをカセットテープにダビングした。当時は、レコードの溝がすり減らないように、テープにダビングして、そのテープを聴くというのはごく普通のことだった。その日から、私はその二枚のアルバムを、毎日毎日繰り返し聴いた。本当に、テープがすり切れるくらい聴いた。

それまでの人生において、あんなにも音楽に夢中になったことはなかった。それから私は、いろんな音楽を聴くことになるのだが、あんなにもヘビーローテーションで聴いたのは、後にも先にもあの2枚だけだろう。それほど私は、あの2枚のアルバムに影響を受けた。まさしく、私の青春時代のテーマ曲と言っても過言ではない。

青春時代の私にとっての、最大の映画スターは、なんと言っても、ミッキー・ロークである。私があればほど憧れたのは、後にも先にも彼一人である。きっかけは、たまたま観に行った二本立ての映画（当時は二本立てがけっこう多かった。私の地元だけかな？）の一本だったランブルフィッシュを観たことである。本当は、もう一本の作品だったフトルースを観るのが目的だったのだが、ランブルフィッシュのほうが圧倒的に面白かった。私は、彼のあまりのかわいさに魅了されてしまった。ミッキー・ロークは、当時はまだ無名で、一方、主演のマット・ディロンのほうは、結構有名で人気があったのだが、あの映画では、ミッキー・ロークが、主演のマット・ディロンを完全に食っていた。

それから、バイクボーイ（そういう役だった）のあの俳優は誰？ という考えが、私の頭から離れなかった。それからしばらくして、何かのきっかけで（それが、どういうきっかけだったのかは忘れた。新聞の広告で見たような気がする。）、彼が、ミッキー・ロークという俳優だということがわかった。それから数年間、私は彼の出演している映画をほとんど観て、彼の魅力にどっぷりはまっていた。彼のようになりたかった、彼のファンであるということを通り越して、彼を愛していた。変な話だが、そういわざるを得ない。

話は変わるが、高校生ともなれば、本気で恋をするようになる。私の本気で好きになった女性が一人いた。一学年後輩の女子だった。クラブ活動（ESS）が同じだったので

知り合ったのだが、とてつもなく美しい女性だった。未だかつて、あれほどの美女にお目にかかったことはない。

しかし、私は彼女に自分の気持ちを伝えることが出来なかった。どうしても、自分に自信が持てなかった。「中学時代にイジメられていたような情けない男が、あんなに美しい女性にまともに相手にされるわけがない。俺なんかには、彼女と付き合う資格なんてないんだ。」そんな感じだった。まだまだ、中学時代にイジメられた記憶を引きずっていたのだ。そんな呪縛から逃れられずにいた。

それにしても、彼女は絶世の美女だった。校内でも噂になるほどだった。背はすらりとして170センチ位はあったと思う。また、彼女の顔が何とも言えなく美しかった。今はやりの、ハーフ美人のようだった。たぶん、彼女は純粋な日本人なのだろうが、ほんとはハーフなのでは？ と思うこともあった。私の四十数年の人生の中で、彼女ほど美しい女性にはお目にかかったことはない。

私は、狂おしいほど彼女のことが好きだったが、彼女と付き合うことはあきらめた。彼女じゃことであろうか、私の友人と付き合いっていたのだ。

後になって、その友人を打ちのめしてでも（私は体格がよく、腕力には自信があった）彼女を自分のものにすれば良かったと思ったのだが、それは後の祭りだった。思春期にはこういうことが往々にしてある。それが青春なのかなあ。

しかし、一度だけ、千載一遇のチャンスがめぐってきたことがあった。あれは、忘れもしない、高校2年の夏休みのことだった。県のESSののキャンプがあった。我々は、ESSという、英会話のサークルに入っていたのだが（まあ、実際には、自分たちで勝手に作ったようなものだった。）、その、県全体の合宿のようなキャンプがあったのである。私は、密かに、もしかしたら彼女とつきあえることになるかもしれない、などと、妄想をふくらませていた。

そして、実際キャンプに行ってみると、他校の女生徒がたくさんいた。目移りするほどであった。しかし、私のお目当ては、彼女のみであった。キャンプも佳境に入ってきて、キャンプファイヤーとなった。そして、その周りで、みんなでフォークダンスのようなものをした。

そして、とうとう私と彼女が踊る番になった。その瞬間、なんと、彼女が私にもたれかかってきた。本来ならば、そのとき彼女をしっかりと抱きしめるべきだったのだ。しかし、私にはそれが出来なかった。後輩の女生徒が、彼女を例の友人のところへ連れて行ってしまった。私が茫然自失したのは言うまでもない。このことは、のちのち、いや今日に至るまで、ずっと後悔し続けている。なぜあのとき、私は彼女を抱きしめることが出来なかったのか、と。

その日を境に、彼女の私に対する態度が変わったような気がするの、私の考えすぎだろうか。

彼女以外の女性に、全く興味がなかったわけではない。ただ、彼女があまりにも美しすぎたため、ほかの女生徒がかなり劣って見えた（失礼な話だが）。

実は、一度だけ、私の人生で初めて、交際を申し込まれたことがあった。それは、他の、一年後輩の女性とだったのだが、直接申し込まれたのではなく、その子のお姉さんを通して申し込まれたのだった。私は、そのありがたい申し出を、やんわりと断った。というのは、その子のお姉さんというのが、私の中学時代のクラスメイトだったからだ。その頃私はまだ、中学時代のイジメられた記憶から逃れられずにいた。

それからかなりの月日が流れ、ああ、やっぱりあの時あの子と付き合っておけば良かった、と思ったのだが、後の祭りだった。やっぱり、恋人はいたほうがいいのである。特に若いうちは。

高校時代 パート 2

そうこうしているうちに、クラスみんなが、大学進学の話をするようになってきた。まだ、高校2年生になったばかりだったので、まだそんな話は早いんじゃないかなあ、と思っていた。そのうち、県外の大学、さらには東京の大学に行く、と言う生徒まで出てきた。そうすると、私も、「こうしてはおれぬ、自分も東京の大学に行こう!」、などと、突然思いついた。いまかんがえると、何でそんなこと考えたのか不思議だが、とにかくそういう気持ちになった。

そうして、私の、大学受験勉強が始まった。それまでは、「早く高校を卒業して、車とバイクを乗り回したい」、と思っていたのだが、一転して、「東京の一流大学に進学したい」と思うようになり、高校2年の2学期から、勉強三昧の日々が始まった。

私は、もともと文学部に進みたかったのだが、親の

「法学部か経済学部、もしくは商学部でなければだめだ。文学部では就職できない。」

という、今考えれば、ばかげた意見に左右されてしまった。まったくもって、アホな親だ。文学部では就職出来ないのならば、文学部という学部自体が存在し得ないではないか。

それで私は、どういう方向へ進もうかと考えていた。そんなとき、偶然に入った本屋で、司法試験について書かれた本を目にした。私は、何気なくその本を手にとって立ち読みした。その本には、裁判官、検察官、弁護士の仕事がかかれていた。私はそのとき、検察官の仕事に興味を持った。まさに、正義の味方といった感じだった。そのとき私は、司法試験を目指すことを決意した。

今考えれば、それが、そもそもの間違いの始まりだったような気もするのだが、まあ、若い頃には往々にしてそういうことがあるものである。それはともかく、司法試験を真剣に志したのであるから、それから（高校2年の2学期）は、一流大学の法学部に合格するため、寝る間も惜しんで、ひたすら勉強に打ち込んだ。

学校から家に帰るのが、だいたい5時頃だった。そして、家に帰るやいなや、勉強を開始した。それが、夕食時の7時頃まで。そして、飯食って、風呂入って、8時過ぎから12時過ぎまで、毎日毎日勉強した。勉強というものも、楽なものではないのである。肉体的にも精神的にも、限界に近いくらいまで勉強した。まるで、修行僧のようだった。

その勉強も、半年を迎える頃限界に来た。それは、自分でもよくわかった。それが、高校3年の春のことである。しかし、その半年間の勉強は功を奏した。というのは、どの全国模擬試験を受けても、どの大学を志望校としていても、合格可能性80パーセント以上のA判定。ことごとく、である。自分でも相当の学力がついたと確信した。

全国模擬試験の成績があまりにも良くなったので、学校の先生たちも驚いており、

「何でおまえは、そんなに成績が良くなったんだ。」

等と言われるようになった。それは、ノイローゼ寸前まで勉強したからである。

「あれだけ勉強したんだから、成績が良くなってとうぜんじゃん。」

等と思っていた。今考えれば、相当自惚れていた。しかし、田舎の普通高校で真ん中くらいの成績だった高校生が、全国模試で名前が載るようになったのだ。自惚れるのも無理のないことだろう。

それまでは、T大を念頭に置いており、実際に射程距離に入ったと思った（実際、全国模試では常にA判定だった。）のだが、半年間の相当な受験勉強に疲れ果てた私は、T大を諦め、私立文系にシフトした。その時点で、相当の実力だついていると確信した私は、私立文系だったらどこにでも簡単に合格できるだろうと思っていたからである。実際、英語、古文、日本史ならば解けない問題はない、というレベルに到達していた。だから、高校3年生になってからはそれほど勉強せず、それまで身につけた学力を維持する、といことにとどめた。そして実際、W大学法学部に現役で合格した。

とはいえ、高校3年生といえば受験生。受験生を持つ親は、親自身もプレッシャーを感じているからなのか、顔を合わせるたびに、

「勉強しろ。」

「勉強してるのか。」と、子供にプレッシャーをかけるのである。そんなことを言っても何にもならない。というか、よけいなストレスを背負わせるだけなのだが、受験生を持つ親はどうしてもそうになってしまうみたいだ。(うちの親だけかな?)

それで、大学に合格したときは、正直言って、これでやっと

「勉強しろ。」

と言われなくなる、ということの喜びが大きかった。思えば、その頃が、私の人生の中で一番幸せな時期だったのかもしれない。それに、両親も本当に喜んでくれた。ああ、自分は親孝行をしているんだなあ、などといい気になっていた。

両親は、あまりの喜びのためか、高校の先生など20名近くを自宅に呼び、宴会までやっていた。さすがにこれはやりすぎだと思うのだが、両親、特に父親としてはそれくらいうれしかったということなのだろう。まあ、そういうことにしといてください。

大学時代

当然のことながら、高校を卒業すると同時に東京へと旅だった。期待と不安の入り交じった心境ではあったが、意気揚々と東京へ進出したのである。

東京は素晴らしかった（まあ、そう感じたのも最初のうちだけだったが。）。何よりも、東京という大都会で一人で暮らしていると言うことに、無上の喜びを感じた。夢にまで見た、花の都大東京である。風呂なし、六畳一間のやすいアパートではあったが、自分の城を得たという感じであった。

その頃の私は、まさに有頂天であった（有頂天ホテルも真っ青）。時はバブル真っ盛り。運が良ければ、司法試験合格。最低でも、一流企業のエリートサラリーマン。まるで、天下人にでもなったような気がした。

今考えれば、なんというバカな思いこみをしていたのだろうかと思うが、当時の大学生はみな似たり寄ったりだったのだろうと思う。80年代の後半、時代はまさにバブルのピークを迎えていた。社会全体が、バブルの美酒に酔いしれていたのだろう（わたしは本当に酒を飲んでばかりいた）。バブルが崩壊することもなく（当時はバブルという言葉さえ耳にしなかった）、このまま、どんどん景気が良くなるばかりだとみんなが思っていたような気がする。まあ、一部の賢明なる人たちは、バブル崩壊を予想していたのかもしれないが。

今の大学生はどうか知らないが、バブル時代の大学生は勉強などほとんどせずに遊んでばかりいた。まあ、せいぜいお小遣い稼ぎのためにバイトに励むくらいだった。バブル時代はバイト代がよかった。私は、時給1500円でバイトしていたので、その気になれば1ヶ月で20万以上稼ぐことができた。（まあ、そのお金でスキーに言ったりしたわけだが。）家庭教師や塾講師をしている友人は、時給3000円は下らないようであった。（中には、製薬会社の新薬を飲んで、高額報酬を得るといった危険なバイトをしている奴もいた。）今思えばいい時代だった。

そんな中でも司法試験受験生は勉強していた。今の法科大学院制度とは違って、10年勉強しても受かるかどうかわからない、といわれていた頃のことである。実際、20年以上も（就職せずに）司法試験受験勉強を続けて、少しおかしくなっているような人が、私のいた大学には少なからずいた。（まあ、私も似たようなものだが。）とにかく、今とは比べ物にならないくらい難しい試験だったので、当時の受験生は（今の受験生もそうかもしれないが）はっきり言って人生を懸けていた。一步間違うと、それまで歩いてきたエリートコースを踏み外し、人生を棒に振ってしまう恐れがあったのだ。当時は、そういう人のことを「司法試験崩れ」と言っていた。そういう人はけっこういたと思う。

私もけっこう勉強した。（まあ、今になって思えば、かなり甘い考えで勉強していたわけだが。）とにかく早く司法試験に合格して、検事になりたかった。（今思えば、自分に、検事などという過酷な仕事が務まるとは思えないのだが、当時は真剣にそう思っていた。）仲のいい友人たちと、競い合うようにして、法律の専門書（司法試験受験生は基本書と呼んでいた。）や予備校のテキストを買い捲った。そんなにたくさん買っても、全部読めるわけではないのだが、とにかく「あの先生の本はいいらしい。」と聞くと、速攻でその本を買った。そんなこんなで、一科目あたり10冊くらいの本を買っていた。当時の司法試験は、憲法・民法・刑法・商法・訴訟法（民訴か刑訴のどちらかを選択）・法律選択・教養選択の7科目であったので、単純計算でも70冊は買った。それにどんどん買い足していくので、トータルで200冊くらいはあったと思う。だいたいそんなに読めるわけではないのだ。それに、中途半端に何冊も読むより、1科目につき1冊を繰り返し読んでマスターするほうがいいに決まっているのだが、どうしてもいろんな本を買って読んでいた。おおむねそういう類の人は合格から遠ざかる。友人などをみても、はやく合格した友人は、1冊の基本書か予備校のテキストを徹底的にマスターして理解している。私なんぞの類は、いろんな本を拾い読みして、結局中途半端な理解なので、試験に合格できないということになる。これから、何かの資格試験の勉強をしようと思っている方々は、あまり何冊も本を買わず、1, 2冊を徹底的にマスターされることをお勧めする。それが一番の近道だと思う。

当時は今と違って、携帯やスマホはなかった。インターネットもまだなかったし、パソコンは一部のマニアしかもっていなかったと思う。少なくとも私の周りでパソコンを持っている人はいなかった。私の友人の中でもっともオタクな友人ですら持ってなかった。ただ、小型のワープロ専用機を持っていた。当時の私にとっては、それすらすごいデジタル機器に思えた。その友人は、小型ワープロを司法試験の勉強に活用していた。彼はそれから20年後弁護士になった。20年を長いと思うかどうかは、人それぞれだと思うが、20年かかってもしなければそれでよいのではなかろうか。ちなみに、彼は朝から自転車で（彼はけたマシンと呼んでいた）ソープランドに行っていた。何でも、早朝割引なるものがあったらしい。

ただ、ファミコンは持っていた。若い人は、実物を見た事すらない人が多いと思うが、当時はファミコンが一世を風靡していた。確か、中古で、1万5千円くらいで買った。初めて買ったソフトは「スターラスター」。これはけっこう面白かった。その後、ファミスタ・ストII・FF・ウィザードリーなど、当時人気のあったソフトはやった。その後、社会人になってから、スーファミが出たので、少し恥ずかしかったが、新宿の某カメラ屋に買いに行った。余談だが、裁判所時代に、優秀な若手エリート裁判官が、スーファミよりもセガのメガドライブのほうが面白いと力説していた（ソニック・ザ・ヘッジホッグがブレイクしていたためか。）。また、書記官研修所で同期だった人は、当時発売されたばかりだったゲームボーイを買って、

「ゲームボーイは買うべきだよ、これやると人生観変わるよ。」と言っていた。

もちろん私は買わなかった。当時のゲームボーイは、昔はやったゲームワッチに毛の生えた程度にしか思えなかった。それから10年以上たって、ゲームボーイ・アドヴァンスを買ったが、別に、人生観は変わらなかった。まあ、当たり前なことだと思うけど。

しかし、ゲームものどかな時代だった。私でもなんとかクリアできた。（少なくとも攻略本をみれば）しかし、現在のゲームは難しい。確かに、いろんな意味でクオリティは高いのだが、私には難しすぎて、攻略本をみてもクリアできない。（涙）

私の学生時代は（まあ、学生時代に限ったことではないのだが）、女性とは無縁だった。しかし、そんな私でも、たった一度だけ、女性に声をかけたことがあった。

平日の夕方、6時から9時まで、司法試験受験生を対象とした講座があったのだが、私はそれを受講していた。ほとんどが野郎ばかりで、女性がいたとしても、司法試験を目指しているような女性には、魅力的な女性はほとんどいなかった。しかし、一人だけ、どうしても気になる女性がいた。しかし、例によって、ただただ思いを募らせるだけであった。

ところがある日、いつものように地下鉄東西線で下宿に帰っている途中、地下鉄の中で彼女を見かけた。「おお、これは運命の出会いだ！」と思ったりもしたが、まあ、そんなことはよくあることだと、自分をごまかしていた。そんなことが、2、3回あったころ、彼女が私と同じ、西〇窪の駅で降りていた。「えっ、彼女ってここでおりてたのかあ。」とかなり驚いた。そして、どうしようかと迷った挙句、駅の改札を出たところで思い切って声をかけた。

「すみません、あのう、さっき〇〇先生の講義受けてたかたですよ。」

「ええ、そうですけど……」

「あの、その、僕もあの講義受けてたんですよ……」

などの、当たり障りのない会話をしながら、夜の商店街を歩いて帰った。女性と二人で歩いたことなど、生まれて初めてのことだった。そして別れ際に彼女は言った。

「こんど子供つれてくるね……」

「はい。え……。こども……」

そうなのだ、森下愛子似の彼女には子供がいたのだ。私はしばらく茫然自失してしまった。

後になって判明したことなのだが、彼女は現役 of 学生ではなく、10年前に卒業していたOGであったのだ。まあ、それが本当の話だったのか、それとも私に対するお断りの意思表示だったのかは、今となっては知る由もない。

彼女とは2、3回会って話したのだが、突然、講義に来なくなり、それ以来彼女と会うことはなかった。私の人生の中で、唯一、自分から声をかけた女性なのに……トホホ。佐野元春の「君をさがしている」を聴くと、必ず彼女のことを思い出す。

実は、高校時代のクラスメイトの女の子も、学部は違うが、同じ大学に進学していた。彼女は高校時代、1年間海外留学をしていたので、私より1年遅く入学してきた。彼女は、偉大なる学者の娘で、しかも、けっこうかわいかった。私は、高校時代から彼女に好意を寄せていたので、彼女が同じ大学に入学してきたと知ったときにはうれしかった。それで、彼女に一度電話をかけた。そのときの彼女の言葉は今でも覚えている。話の最後に、

「もちろんだ君の友達で、風間とおるに似てる人がいたら紹介してよ！」

「ああ、風間とおるね……。」当時、風間とおるは一世を風靡していた。私の友達にそん

な奴いるわけがない。私ははっきりいってがっかりした。あわよくば彼女と付き合えるかもしれないと思っていたのに・・・トホホ。

結局、彼女には恋人が出来た。まあ、風間とおるほどではないにせよ、今で言うところのイケメンだった。

大学時代にはいい出会いが多かった。(女性関係は別だが。) その中でも、一番の出会いが、元最高検察庁検事のT先生だった。T先生は、検事を退官されたばかりで、(当時は、あの伊藤栄樹検事総長から、前田宏検事総長にかわったところだった。) 国立大学の教授をされていたのだが、私の通っていた大学でもゼミをもたれることになったので、当時、無謀にも検事を目指していた私は、速攻で、先生のゼミに入った。

そして、初めてのゼミの飲み会がある日、先生と一緒にみんなで高田馬場まで歩いていった。そのとき私は、ふと、先生にたずねた。

「先生、先生はなぜ検事になられたのですか？」

「人生は感動ですからね！」

先生は即答された。

「はあ、そうですね・・・」

私は一瞬その意味がわからなかったが、直後に素晴らしい感動を覚えた。その言葉の本当の意味は今でもよくわからないのだが、そのときのことは昨日のこのように覚えている。

私が裁判所事務官になって、司法試験を続けると言ったときは喜んでくださったのだが、裁判所を辞めてからは、音信不通である。まったく、不義理なことをしてしまった。T先生どうか私を許してください。

まあ、東京での大学時代はバブル最盛期であったが、私の人生のバブルでもあったようだ。しかし、日本という国家も、高度経済成長期やバブル時代があったからこそ、国家として成熟したのだと思う。であるから、私という人間(まあ、私に限ったことではな

いかもしれないが。)も、人生のバブルを経験したからこそ、人間的に成長したのだと思う。まあ、成長したということにしておこう。

裁判所時代

大学を卒業すると同時に、私は裁判所事務官として、最高裁判所に勤務することとなった。司法試験を目指していたので、裁判官ならともかく、事務官というのは本意ではなかったが、親がどうしても公務員になってくれとういので、しかたなく公務員になった。なぜ、親が、特に母親が公務員を望んだかという、父親が勤めていた会社（まあ、病院なのだが）が倒産してしまったからである。それから母親は、気が狂ったように（まあ、半分くるっていたと思うが）私に対して、

「絶対公務員になりなさい。民間企業はつぶれるかもしれないから。」

と、呪のように、繰り返し繰り返し言ったのだった。

それで私は、しかたなく公務員になったのだ。だから、後にひきこもりになってから、親を、特に母親を、徹底的に罵り倒した。今でも時々怒鳴り散らす。やはり、仕事は自分の好きな仕事をするのがいいと思う。少なくとも、自分で決めるべきである。親も、就職に関しては、あまり干渉せずに、本人の気持ちを大事にしてほしい。まあ、やくざになりたいとか、ソープランドで働きたいなどといった、極端な場合は別だが。

ここで、学生の方には、ひとつだけ聞いてほしいのだが、仕事は自分で選ぶべきである。親や他人の意見に従って仕事を決めてしまうと、後々、後悔することになると思う。まあ、私が失敗したからなのだが、自分で選んだのであれば、後悔は少ないと思うが、親に決められた道に進むと、失敗した場合に、やりきれないほどの後悔が残る。

事務官になるのは、本意ではなかったとはいえ、最高裁に勤務することになったので、正直言って、浮かれていた。それも仕方のないことであろう。何はともあれ、天下の最高裁判所であるのだ。両親も本当に喜んでくれた。やっぱり自分は孝行息子なんだなあ、などといい気になっていた。

しかし、どこの職場も同じであろうが、外部からみた最高裁と、実際ではかなりギャップがある。世間一般の方が聞いたらがっかりすることも多い。私も、最高裁には失望させられた。今考えれば、最高裁に勤務したのがそもそもの失敗の始まりのような気がする。

今でも憶えているのだが、採用されて間もない頃、隣の係りの課長補佐が言った、

「なあ、もちろんだくん。裁判官と事務官は、まあ、白人と黒人だからな。」

「え？」

私は耳を疑った。最高裁判所の課長補佐がこんな人種差別発言をするとは。こんなことをいうやつは、はっきり言って人間失格だと思う。

詳しくない人のために説明すると、裁判官は司法試験に合格して、司法修習を受け、その中でも優秀な人が任官している。一方、事務官は、それよりずっと格下の、事務官採用試験合格者の中から採用される。人事体系が全く異なり、裁判官と事務官では、確かに月とすっぽんである。裁判官が主人公で、事務官はただの事務員である。

しかし、である。最高裁の課長補佐（こいつも事務官なのだが）ともあろうものが、新人に向かって（まあ、相手がだれであれ関係ないのだが。）、そんな人種差別発言が許されるのであろうか。まったく、最高裁には人間のくずのような奴が山ほどいた。私は、何でこんな奴らが司法の頂点である最高裁にいるのか疑問だったし、こんな奴らが巢食っている最高裁が、日本国民の人権救済の最後の砦たりうるのかと、なんだか情けなくなった。

このように述べると、最高裁にはまともな奴は皆無かと思われるかもしれないが、安心してください。最高裁にいる裁判官は能力的にも、人格的にも優秀なばかりでした。また、事務官も、どうしようもない奴らというわけではなく、裁判官に対して、かなり強い劣等感を持っていたため、ひがみ根性丸出しの奴もいたというところですね。まあ、ベテランの事務官より、新人の裁判官のほうが格上になってしまうのだから、ひがみ根性を持つ事務官がいてもしかたのないことかもしれませんけどね。

こういうように、裁判所は階級社会でしたね。まあ、裁判所に限らず、公務員の世界は、どの試験で採用されたかで出世も何もかもきまってしまうんですけど。

また、当時の最高裁で不思議だったのは、残業するとき5時過ぎたら、酒を飲みながら残業していたということですね。酒を飲みながら、である。まあ、私がいた部署だけだったのかもしれないが、仕事に、ましてや最高裁の職員が酒を飲んでいいのだろうか？現在の最高裁でそんなことが行われているとは思わないが、当時は普通に、残業中に酒を飲んでいた。

総務庁（当時）から出向してきていた、アホな課長補佐は、

「おれは、酒を飲まないで車の運転できないんだよ。」

などと、アホなことをほざいていた。おれはこいつが本当に嫌いだった。俺はW大卒だが、そいつはC大卒だった。そして、初対面のとき、

「ぼくは、もちろんださんが嫌いなんですよ。ぼくはW大に落ちましたからねえ。」

などと、訳のわからないことをいっていた。

それでも、最初の頃は楽しかったですね。自分がいっばしのサラリーマンになったような気がして、仕事に行くのが楽しかったものです。ホストコンピューターのオペレーションと、アセンブラで簡単なプログラム（まあ、ゴミプロですけど）を作るのが仕事でした。当時（20年くらい前）は、今のようなコンピューター社会ではなく、パソコンはマニアのためのものでした。MS-DOS 全盛期で、職場の先輩が、

「そろそろ、Windows が出るぞ！」

などと言っていたのですが、私としては、

「ウインドウ・・・窓・・・。何ですかそれ。」

そんな感じだった。ましてや、Mac や Linux など聞いたことすらなかった。

私はそれまで、コンピュータなどというものには触ったことがなかったので、ホストコンピュータを操作したり、プログラムを作ったり出来るのか、はっきり言って疑問でした。しかし、若いうちは何でも出来るようになるものです。少しずつではありますが、何とかできるようになりました。しかし、当時はわけもわからずやっていたので、なんとも思わなかったのですが、ちょっと、今考えると不思議なことがあります。それは、ホストコンピュータのデータベースからデータを取り出すのに、わざわざ1週間くらいかけ

て、プログラムを作っていたのです。データはすぐに取り出せないと、データベースの存在意義が半減すると思うのですが。まあ、私も含めて、素人がやってたわけですからね。

しかし、楽しかったのも最初の半年だけ。書記官研修所の試験に合格してから、自体は一変しました。

イジメ・・・が・・・始まった。

「な、なんで？」それが正直な気持ちだった。

司法試験受験生にとって、書記官研修所入所試験はそんなに難しい試験ではない。しかし、周りの人たちは、高卒であまり法律の勉強をしていないおっさんやおばさんが多かった。そういう人たちから反感を買ったのだ。しかし、最高裁に勤務しているのに、法律の勉強をしていない人が多い部署っていったい何なんだ？

イジメの話になったので、ついでに話しておくが、最高裁では、至る所でイジメが行われていた。おっさんがおっさんをイジめる。おばさんがおばさんをイジめる。ベテランが新人をイジめる。はっきり言って何でもありだった。私の場合は、無視される、というイジメだった。

私も最初のうちは、そんなイジメに負けてなるものかと思い、がんばった。私の態度が気に食わなかったおばさんは、

「あれは、最高裁に対する挑戦ですよ！」

などと、私にあえて聞こえるような大声で言っていた。そのおばさんは、お茶くみなどを全部私に押し付けていた。あるひ、イジメの精神的苦痛から、よろめいて湯飲み茶碗を全部ひっくり返してしまった。もちろん、そんなことわざとするわけではないのだが、そのおばさんは、私がわざとやったと思ったらしく、

「そんなにやりたくないんなら、やらなくていいわよ！」と、切れ気味に言った。全く、人間のクズである。

それから、仕事を干されて、会議などにも、私一人だけ参加できなくなった。そうなる
と本当に精神的にきつくなって、辞めたいと思うようになった。

今になって思うのだが、理不尽なイジメに屈服する必要はない、と思う。やはりあの
とき、私は戦うべきであったと思う。周りの人間に、気に入られる必要もないし、どんなに
こっちが気に入られようとしても、気に入られないことは往々にしてある。戦うことを
恐れてはならない。戦うとは、別に、暴力的な手段のことを言っているのではなく、人
間性、個人の人格が侵害されているときには、何らかの手段で応戦するべきだと思う。

周りの人間に嫌われたとしても、自らの信念を持って戦うべきだったと思う。

私はあのとき、戦うことをやめた。それは間違いだったと、今頃になって気がついた。周
りの人間に嫌われることを恐れて、戦うことを止めると、人間的にハートが弱くなるよ
うな気がする。私はそのときから、こころが弱くなったような気がする。周りの人間に
嫌われるのを恐れて、戦うことを止めたからだ。

わたしは、また戦い始めようと思う。いや、戦う！ 一度は捨てた命だ。死ぬまで戦い続
ける。やられたら、やり返す。

国民の人権をまもるべき最高裁判所で、イジメが横行しているなんて。私は幻滅した。最
高裁でイジメられたら、いったいどこに訴えればいいのか？ 警察？ 検察？

最高裁でイジメが横行していた理由のひとつに、全司法という裁判所職員の労働組合の
存在があるだろう。いったい何のためにあるのか訳の解からない労働組合で、変な力を
持っていた。組合に逆らったものはイジメル。まあ、そんな感じだった。それで、職場
内でも、変な人間関係、力関係が出来上がっていた。まったく、全司法などつぶれてほ
しい。

人権をまもるべき最高裁で、日常的に人権侵害（イジメ）が行われていた。私もイジメ
を受けた一人だ。はっきり言って、それが原因で、精神的にぼろぼろになった。死にたく
て死にたくてたまらなかった。誰にも相談できなかった。まあ、今考えれば、何らか
の方法があったのだろうが、当時はどうすることもできなかった。ただただ、自殺願望
にとりつかれていった。通勤途中、誰かが遠くから私の頭を、ライフルで打ち抜いてく
れればいいのに、などとわけのわからないことを考えていた。通勤で乗っていた地下鉄

東西線で、終点の西船橋まで行ってみたかった。最高裁には行かずに、西船橋まで行ってみよう。そう思うこともたびたびあった。しかし西船橋にはとうとう行かなかった。飯田橋で有楽町線に乗り換えて、永田町まで通っていた。西船橋っていったいどんなところなんだろう？ きっと素晴らしいところに違いない。いつの日か行ってみよう、私の懐れの地、西船橋へ。

とりあえず、書記官研修所には入所した。しかし、すでに精神的にぼろぼろだった私は、辞めることしか考えていなかった。書記官研修所には親切な人が多かった。中には、私を食事に誘ったり、飲みを誘ったりしてくれる人もいた。しかし、精神的に崩壊していた私は心を開けずにいた。それで、某国立病院の精神科に連れて行かれた。それが私の、精神科との出会いだった。

精神科通院も虚しく、私は書記官研修所を辞めた。つまり、裁判所を辞めた。一年半という、短い裁判所時代だった。

このように書くと、裁判所はどうしようもないところだったということになるので、少し補足しておく。

まず、最高裁時代だが、最終的には嫌になったのだが、決して嫌なことばかりではなかった。部署の、上司や先輩は残業があるたびに、飲みを連れて行ってくれた。まあ、最高裁の近くの町村会館か、赤坂見附のバーだったのだが、けっこう楽しかった。そんなときは、これがサラリーマンだよな、などと悦に入っただけである。

上司の中でも、A 係長はかなりいい人で、とてもお世話になった。詳しくは1書かないが、実家が裕福だったので、妻子もち（当時40代だったと思われる。）だったのに、裁判所の給料は全部自分のお小遣いに出来たらしかった。だから、車好きな係長は、当時WRCで活躍し、マニアに人気のあった、ランチャ・デルタ・インテグラレに乗っていた。たしか、500万円以上したと思う。まあ、ベンツやBMは、金持ってる人だったら買うだろうが、ランチャは、よほどの車好きでなければ買わないだろう。一回、富士五湖のワインディングに走り連れて行ってもらったが、あまりのスーパーテクだったので、わたしは途中でゲロしてしまった。なんでも、学生時代からラリーをしていたそうで、かなりのドラテクだった。ヒール・アンド・ツーや、ダブルクラッチなども、いとも簡単にやっていた。

また、お金があるからなのか、銀座のすし屋にも連れて行ってもらったりした。本当に感謝している。彼は、もう定年退職しているが、今でも年賀状のやり取りはしている。

そして、イジメに関してだが、最近私が思うに、それは私の単なる被害妄想ではなかったのではないかと。ということである。というのは、書記官研修所の試験に合格するまでは、それなりに円滑な人間関係だったのだが、試験に受かったことを実家の家族に電話報告してからおかしくなったのだ。みんな喜んでくれたのだが、祖母が、

「気をつけていないと、周りの人から邪魔されるかもしれんよ。」などと言った。

私はその時、そんなことはないだろうと思った。しかし数日後、先輩や上司から、部署に残るように、暗に諭された。その時、ばあさんの言った言葉を思い出して、被害妄想全開になって、疑心暗鬼の日々が続くことになったのだ。だから、あれは、私が周りの人たちに対する感謝の心を持たずに、疑いのところを持ったのが、私の精神崩壊の原因だったのであろう。皆さんも、あまり周りの人を疑わずに、信じぬきましょう。人を疑ってもろくなことはありません。いま、仕事上の人間関係で悩んでおられるかたは、もう一度冷静になって考えていただきたいのです。私の経験上、人間関係のいざこざは、単なる誤解であったことがほとんどです。ちょっとした誤解で、周りの人を疑ってしまうと苦しくなってしまいます。疑うよりは、信じ抜いてたまされたほうが楽です。それに、ほとんどの場合は、勝手な思い込みの場合が多いと思います。少なくとも私はそうであったと思います。

周りの人に感謝することからはじめましょう。そのためには、まずご両親に感謝することからはじめるべきだと思います。子供の頃の楽しかった出来事を思い出せば、自然に、ご両親に感謝することが出来ると思います。自分の両親も、こんなにづらい思いをして仕事をして、自分を育ててくれたのだなあ。そう思うと、感謝の心があふれてきます。それに、自分の周りの人たちも、同じように、それぞれの家庭で育ち、親もいれば子供もいる。そんな普通の人たちがほとんどなのです。自分自身の心と、行動の映し鏡が周りの人だと思っていいと思います。少なくとも私の場合はそうでした。ですから、私は、人を疑うことを止めます。それは自分で自分の首を絞めることになりますからね。

40代になった今だからこそ言えるのかもしれませんが、人間関係で悩みを抱えてしまったら、勇気を持って、自分の感じていること、気持ちなどを、職場の人に話し、また、周りの方の本音を、思い切って聞いてみるのがいいと思います。人間関係の悩みの大部分は、誤解や思い込みが原因となっている場合が多いので、一度、腹を割って話せば、案外簡単に解決するかもしれません。私に似は出来ませんでしたが、勇気を持って、冷静

に話し合ってみるべきだと、今ではそう思います。

もう一人、恩を感じている人物はいる。その人は、S裁判官である。彼は、書記官研修所で、学年主任か教務主任を務める傍ら、刑事訴訟法の授業も受け持っていた。

私は当時、精神的に卑屈になってしまっていたので、研修所の和を乱すこともあった。例えば、昼食は、みんな書記官研修所の食堂で食べていたのだが、私は、みんなと一緒に食べるのが嫌だったので、近くにあったモ〇バーガーで、毎日ハンバーガーやライスバーガーを食べていた。(はっきり言って飽きた。そんなことをしていたから、他の研修生とはますます気まずくなっていった。) そんな時、S先生は本気でしかってくれた。私はそれがうれしかった。ラーメン屋でビールを飲みながら語り合ったこともあった。そんなこんなで、私のことを一番気にかけてくださっていた。

私が、とうとう辞めることが決まって、会議室のような部屋で、お手本をみながら辞職願を書き上げ、後は、所長に提出するだけとなった土壇場でさえも、S先生は部屋へ駆け込んできて、

「もちろんだ君、今ならまだ間に合う！ 早まるな！」

とって、最後の最後まで、私を引き止めてくださった。にもかかわらず、私は辞めてしまった。

裁判所を辞めたことは、後悔していないが、S先生のご恩に報いることが出来なかったことは、今でも心残りである。

まあ、20年経った今考えれば、裁判所事務官という仕事は、私にはちょうどよい仕事だったのだろうし、公務員という仕事はいろんな意味で恵まれている。それに、今の自分だったら、裁判所で経験した人間関係の問題など、何とか乗り切ることが出来るかもしれない。しかしそれは、20年の人生経験があつてのことだから・・・。

とにかく、世間知らずだったのですね。どこに就職したとしても、おんなじ様なことで悩んだと思います。私としては、いい経験になったといったところですかね。まあ、いろいろ書きましたが、私は別に裁判所を批判したいわけではなく、最高裁を批判したい

わけではありません。(まあ、批判のようなことを書いてしまいました。) 司法権というのは、少数者の人権を守るためには、絶対に必要ですし、裁判官の方々は、いろんなプレッシャーのなかで、よりよい解決を図るべく奮闘されていると思います。私が知り合った裁判官の皆さんは、みんなそうでした。行政庁や国会とは、根本的に違うのですね。それに、公務員の方は、基本的にまじめな方が多いのは事実です。一部には、変な人がいたり、悪しき習慣があるのも事実でしょうが、民間の会社に比べれば、はるかに優れているでしょう。みんな、最低限の社会常識や幅広い教養を身につけています。そうでないと、公務員試験には合格しませんからね。民間には、とんでもない魑魅魍魎がうようよしてますし、それに比べたら、聖人君子の集まりといっても言い過ぎではないでしょう。

ひきこもり時代

裁判所を辞めたあとも、しばらくは東京で生活していた。まだ、大学時代の友人が、司法試験を受験していたりして、遊び友達はいた。それに、多少はお金もあったので、大学時代の友人と、酒を飲んだりして、ぶらぶらしていた。生活費を切り詰めるために、カップラーメンばかり食っていた。カップラーメンは、時々食うとうまいけど、毎日だとやっぱり飽きる。タバコも、当時200円だったハイライト・マイルドにした。一日中アパートにいて、スーフアミばかりやっていた。そのころは、ストIIターボ（動きがやたらと早かった。）、ファミスタ、FF3、ウイザードリーなどを飽きもせずに行っていた。また、そのころ、やたらと芥川龍之介、太宰治、チャンドラー、ハメットなどを読んでいたので、当時全盛期を迎えていたワープロ専用機オアシスで、小説もどきのようなものを書こうとしていたのだが、どうしても書けなかった。やっぱり、才能が・・・。

はっきり言って、このころから人生の目的を見失ってしまった。

私が裁判所で経験したことくらい、一般社会人のかたは、多かれ少なかれ経験されているのだろうが、私は乗り越えることが出来なかった。もう、俺の人生は終わったな等と感じていた。とにかく早く死にたかった。

それから1年ほどすると、お金も底をついてきたので、私は実家に帰ることにした。また、これが失敗であったのだが・・・。人生最大の失敗だった。

私が実家に帰ることが決まってから、大学時代の親友数名が、井の頭公園でパーティーをしてくれた。その頃はまだ、司法浪人している友達が多く、お金もあまりなかった（まあ、今では弁護士になったりしてけっこう稼いでいるのだが）。それで、吉祥寺の商店街で、あまりお金をかけずに酒や食い物を用意した。最初、ホームレスのおっさんたちから、花火を売りつけられそうになるなどのハプニングもあったりして、けっこう思い出深いものとなった。

それまでの飲み会では、みんなで大騒ぎしていたのだが、その時ばかりは、みんなしんみりしていた。俺のために、こういうパーティーを開いてくれたんだなあ、という感謝

の念と、もう、これでお別れなんだなあ、という思いから、泣きそうになった。斉藤和義の「空には星が綺麗」を聴くと、今でもあのパーティーのことを思い出す。

そして、引越し当日も、東京在住の親友は手伝いに来てくれた。みんな無言だった。引越し業者のトラックが去った後、後片付けと掃除をした。本当は、その後、みんなで食事でもしようと思っていたのだが、飛行機の搭乗時刻が気になったので、食事はやめて、区役所へ向かった。住民票を移すためだ。みんなずっと無言だった。そして、地下鉄の入り口……。そこで別れた。親友の一人は俺に何か言いたいみたいだった。俺も、何か言いたかった。でも、

「じゃあ……。」

そんな言葉しか見つからなかった。後になって気づいたのだが、俺は、本当はあの時、引き止めて欲しかったのだ。

「もちろんだ、実家になんか帰るなよ。俺たちと東京で頑張ろうぜ！」……と。

そのときのことは、今でも、昨日のこのように憶えている。Bzの「ミエナイチカラ」を聴くと、なぜだかそのときのことを思い出す。

都会で挫折して、実家にかえってやり直そうと思ったのだが、そんなに甘くはなかった。負け犬として帰ってきた私に対して、家族は冷たかった。相当罵られた。そのことは、今でも恨みに思っている。私のような人も、少なからずいるのではなかろうか。

「もう、死んだ方がましだ。」

「俺にはもう何も出来ない。」

そう思うようになった。それから、引きこもり生活に突入することになる。25歳くらいのことだった。しかし、当時はまだ、「ひきこもり」という言葉が生まれる前であった。「ひきこもり」という言葉が一般的に使われるようになったのは、それから、2、3年後の、私が「ひきこもり」から抜け出した頃のことだった。このころ、ひきこもりに関して、一番よく理解されていたのは、精神科医の斉藤環先生だとおもう。先生は、他の専門家に先駆けて、いろんなメディアで、ひきこもりに関して、述べておられた。素晴らしい分析力で、ひきこもりの実態も、よくリサーチされていたようだ。それから、引きこも

りが社会問題化されて、いろんな人が、いろんなことを言っているが、ハッキリ言って、机上の空論である。ひきこもりの実態を知らずに、どこかで聞きかじったようなことを元に、かってに、ひきこもり像をでっちあげており、やれ、甘えだ、根性がない、などと、わけのわからない精神論をぶちかましている。まったく、馬鹿な評論家は百害あって一利なしである。精神論ですませるならば、すべてのことは精神論で解決してしまう。引きこもりに関しての第一人者は、間違いなく、斉藤環先生である。斉藤先生にはずいぶんと救われた気がする。

ここで少し補足しておくが、実は実家に帰ってからすぐ、親父のコネで、税理士事務所に勤めたのだが、1ヶ月くらいで辞めた。税理士事務所にしてはやたらと職員の数が多く、10人以上いたと思う。相当儲かっているようだったが、どうも職場の雰囲気になじめなかった。ただでさえ、自信喪失していたし、その女性職員の乗りについてゆけなかった。

「あの人は（私のこと）、ちやほやされないと嫌なんだろうね。」

などと、女性職員から陰口をたたかれたが、私は、

「別に、ちやほやされたい訳じゃないよ……。ただ、仲間に入りづらいただけだよ……。トホホ。」

といった気持ちだった。まあ、言えなかったけど。

そして、また公務員になろうと思い、予備校に通った。半年くらい勉強して、国家公務員から、地方公務員まで、ありとあらゆる公務員試験を受けたのだが、全部落ちた。県の現業職の試験にも落ちた。（たぶん、この試験は完全なコネ採用の試験だったと思う。試験を受けていたのは、頭の悪そうなおっさんばかりだった。地方公務員は今でも、コネ採用が多いみたいだ。）それで私はますます自信を無くしていった。

最初、なぜだかわからないが、やたらと痩せて体重が減ってきた。それまで、72, 3キロあった体重が3, 4ヶ月で59キロまで減った。身長は177, 5cmなので、70キロくらいが平均体重だと思う。59キロは痩せすぎだった。もちろん、ダイエットなどではない。ただ単に痩せてきた。しかも急激に。

うつ状態で、食欲など全くなく、コーヒーを飲んで、タバコを吸ってばかりいた。食べ

るには食べていたが、何を食べてもおいしいとは思えなかった。だから、体重は、ドン
ドン減っていったと思うのだが、59キロまで減ってからは、体重を計るのが怖くなっ
たので、何キロまで減ったのかは解からない。

そして、昼と夜が逆転した生活になった。朝遅くまで寝ていて、夜は遅くまで起きてい
るので、必然的にそうなった。昼間寝ると、なかなか外出しなくなり、その頃から対
人恐怖症になった。引きこもりの原因は、ほとんどが対人恐怖症だとおもう。そのきっ
かけは、人によって様々だろうが。

昼間寝てるので、活動するのは夜だった。今みたいに、パソコンも携帯もなかったので
(90年代半ばなので、そろそろ普及し始めたころだったが、私はもっていなかった。
Windows 9.5で大騒ぎしていたのが懐かしい。) 何の楽しみもなかった。スーフアミは
あったので、2階の自室でゲームをやっていたら、母親がいきなりやってきて、

「オタクになったねえ・・・。」と悲しそうにつぶやくのだった。こっちが悲しくなった。

一日中、タバコをふかしながら、ラジオを聴いていた。そして、毎日のように、夜中、車
で海まで走った。(親が買ってくれた、トヨタのスターレットだった。決して高級車では
なかったが、よく走る車だった。へたなスポーツカーより速い感じだった。ハイメカツ
インカムエンジンはよく回った。アクセルを踏めば踏んだだけ加速した。また、燃費も
よかった。) それが唯一の楽しみだった。1時間くらいかけて海に着いたら、夜景を観
る。きれいだった。はるかかなたに見える、S半島の夜景は本当にきれいだった。星空
も、お月様もきれいだった。

「夜景はあんなにきれいなのに、おれのところは・・・」

などと思っていた。缶コーヒーとタバコをのみながら。

そして、帰りには決まって、自販機でタバコを買った。引きこもり当時は、コンビニに
行くことすら恐ろしかったので、買い物は(タバコだけだが)自販機で済ませた。それ
も、昼間は人目が気になるので、夜中に買いに行っていた。

時には、高校時代の友人とドライブしたりしたが、どうしても気分が乗らなかった。社会
人として仕事をしている友人に対して劣等感を感じて、どうしても卑屈になってしまっ

た。また、このころ、

「お仕事は何をされているのですか？」とか、

「今日はお仕事お休みなのですか？」などによく聞かれた。それが、ものすごく嫌だった。俺が何の仕事をしていようが、あるいは仕事をしていまいが、あなたには関係のないことでしょう。など感じていた。そのトラウマのせいかな、今でも仕事のことを効かれるのが一番嫌だ。

毎日毎日、タバコを吸いながらラジオを聴く。そして、コーヒーを飲む。ただ、その繰り返しだった。親を恨んで、裁判所時代に俺をイジメた奴らをひたすら恨んだ。

毎日毎日、親子喧嘩をした。子供の頃から社会人になるまで、親に逆らったことがなかった。かなり激しい親子喧嘩だった。とにかく、世間体第一の親が憎かった。

「俺は、世間体という名の魔物に殺された。」

そんな気がしていた。

「世間体ばかり気にするくらいなら死んだほうがまだ、バカやロー！」

本気で親を殺したいと思った。今でも時々そう思うことがある。40過ぎた現在でも、70歳の親と、しょっちゅう親子喧嘩をする。こんなことでいいのかな？ まあ、いいか。

当時は、

「早く死にたい。」

ただ、そう思っていた。まあ、今でもそう思うことはよくあるが。

今思えば、なのだが、もし恋人がいたら、ひきこもりになんかならなかったであろう。当時は恋人がほしかったが、もともともてない上、引きこもっているのだから、恋人なんて出来るはずもない。恋人のいるひきこもりなんているのかなあ？ まあ、いいか・・・。

今思うことなのだが、ひきこもりの時には、とにかく一人で悶々としていた。なるべくなら、友達などと何でもいいから話をするのがいいと思う。まあ、それが出来ないからひきこもっているのかもしれないが。いのちの電話センターとか、こころの電話センターとか、そういうところに電話をかけてみるのもいいと思う。けっこう親身になって聴いてくださるので、活用して欲しい。(ひきこもり等の方々は。)とにかく、誰かとコミュニケーションをとって、自分の気持ちを正直に伝えることは大事だと思う。これは、ひきこもりの人だけではなく、サラリーマンも同じだと思う。言いたいことを言わずに、溜め込んでおくと、かなりのストレスになる。本音で語り合える人たちを大事にしたいところだ。家族と話すのももちろん大事だが、ともすれば感情が爆発して喧嘩になりやすいので、そこは注意しよう。とにかく、自分の感情、特に怒りや不安感、焦燥感と向き合い、うまく感情をコントロールすることが必要だと思う。まあ、それがけっこう難しいんですけどね。

それで、私は、素人向けの心理学の本や、自己啓発本などを読んだ。まあ、それで事態を解決できたわけではないが、本を読んで自分自身を省みることも必要だと思う。また、ひきこもりの最中は時間があるので、何らかの勉強をするのがいいと思う。今だったら、パソコンやプログラミングの勉強、あるいは何らかの資格の勉強をすることがいいとおもう。精神衛生上もいいと思うし、後になって役に立つかもしれない。

まあ、私はそんな前向きな気持ちにはなれませんでしたけどね。

一度、本当に死のうと思って、夜中に車で海へ行行って、橋の上から飛び降り自殺しようと思った。しかし、出来なかった。車から降りることすら出来なかった。

そして次の日、新聞をみて驚愕した。私が飛び降りようとした、その場所で、同じ日に、飛び降り自殺していた人がいたのだ。私は寒気がした。

人間、そんなに簡単に死ぬるものではない。

そして、私は決断した。自分の精神状態がまともではないことは解かっていた。だから、某国立病院の精神科に行った。

母と病院に向かう車の中で、

「俺の人生も、もう終わりだな。」

などと、感じていた。

そして、病院について、受付に向かう。

「あの一、精神科を受診したいんですけど・・・」

勇気を振り絞って、震える声で言った。

受付の、女事務員は笑っているようだった。

「こいつら、俺のことをキ○ガイだと思ってバカにしていやがる。」

などと思っていた。

精神科を受診しに来ているのは、私だけではなかった。ほかに数名いた。なぜだかほっとした。

そして、とうとう私が診察を受ける番が来た。もう、いっそのこと殺してくれといった心境だった。主治医は若い男性だった。まだ20代の好青年といった感じだった。細かいことまでは憶えていないが、簡単な話をして、精神安定剤と睡眠薬を出してくれた。

なぜだかほっとした。不思議に気分が楽になった。たとえ、他人から精神病の烙印を押されたとしても、心の苦しみが無くなるのならばその方が良かった。帰りに、数年ぶりにコンビニで買い物をした。不思議と恐怖感は無くなっていた。

それから、私は、何とか外出できるようになり、ひきこもりから抜け出すことが出来た。3年くらいのひきこもりであったが、私としては20年くらい引きこもっていたような気がした。実際、何か、清水の舞台から飛び降りるような、そんなきっかけがないと、ひきこもりから抜け出すのは困難なような気がする。

次の目標は、何か仕事かバイトを探すことだった。三十路が近づいていた頃のことである。

引きこもりで苦しんでいる人には、精神科受診をおすすめする。それが、ベストな選択

肢であるかどうか解らない。他に、もっと良い方法もあるだろう。しかし、どうしようもなく苦しいのであれば、思い切って精神科を受診するのも一つの方法だと思う。

しかし、精神科に行くことが、本当にいいことなのかは、はっきり言って私には自信がない。というのは、その後、今日に至るまで精神科に通院しているが、定期的に、精神が不安定になって、仕事を辞めているからだ。具体的に言うと、疲れていないときはなんともないが、体が疲れてくると、精神的にも参ってしまい、普段なら耐えられることが、耐えられなくなり、被害妄想全開になり、仕事を辞めてしまうのだ。しかし、それは、精神科に通っているからそうなったというわけではなく、そういう有様だから精神科に通っている、ということなのだが。

精神科に行くかどうかは、自分で判断してほしい。しかし、まあ、自殺するくらいだったら、精神科に通ってみるべきですね。

最近になって思うのだが、引きこもっているのはよくない。あたりまえだけど。家族としか話さないで、何だか、いつもイライラして親を、疎ましく感じることもある。しかし、ここに大きな問題がある。引きこもりは、どんな形であれ、親に面倒を見てもらっている。それは、本当にありがたいことなのだが、引きこもっているうちは気がつかない。仕事をするようになると、世間の厳しさにさらされて、親のありがたみがわかる。赤の他人が面倒を見てくれるほど、世の中は甘くない。だから、何でもいいから、バイトや仕事をするのもいいだろう。すぐにやめてもいいし、少しでも仕事をすれば、親も、自分（本人）を少しは理解してくれるようになる。ただ、引きこもりから、急に仕事というのは、かなり勇気が必要になる。しかし、清水の舞台から飛び降りるつもりでやれば、意外と、何とかなるものである。まあ、そう簡単にいかないから、引きこもっているんですけどね。しかし、仕事をするのは、いい起爆剤にはなると思います。（いい意味で）

また、本来ならば、結婚、就職などをして、独立して生活しているのが本来である年齢であるのならば、やはり、両親、家族には感謝すべきでしょう。家がいやだったら、別のところに住めばいいのですが、それができないから、親の世話になっている訳なので。少なくとも、感謝しましょう。そのうち、道は開けます。

警備員時代

精神科に通い始めて2, 3ヶ月すると、精神的にだいぶ落ち着いてきた。それで、何か仕事をしようと思った。まだ、完全に自信を取り戻したわけではなかったので、何か自分に出来そうなものを探すことにした。それで思いついたのが、工事現場の警備員である。まあ、これはけっこうきつい仕事なのだが、そのときはなんとなく自分にも出来そうな気がしたので、求人誌で見つけた警備会社に面接に行った。

面接官は、若くてきれいな事務の女性で、即採用となった。まあ、後になってわかったのだが、警備員はきつい仕事なので人の出入りが激しいため、誰でも採用されるのだ。

警備員の仕事は、きつくはあったが、まあ、けっこう楽しかった。自給もわりとよかったので、月に20万くらいはもらっていた。しかし、夏は暑く、冬は寒く、当たり前のことだが、かなりハードだ。また、道行く車を、止めたり、通したりと、気が抜けないので、精神的にもきつい。はっきりいって、よっぽどの変人でないと、なかなか長続きする仕事ではないと思う。この頃になると、もう引きこもりとはおさらばした。自分がまっとうな社会人になったような気がしていた。30歳前後のことである。

このようにしてみると、ひきこもりから抜け出すには、精神科に通って、何か仕事をするのが一番手っ取り早い方法のような気がする。しかし、いったん精神科に通い始めると、通院が長引いたり、薬を飲み続けることになりやすいので、その辺はよく考えた上で、自己責任で実行してほしい。今になって考えると、カウンセリング、アロマセラピー、マッサージ療法（そんなのがあるのか解らないが、マッサージはリラックス効果抜群だと思う）、音楽療法、作業療法など、なるべく薬を用いずに復活するほうがいいような気がする。

しかし、警備員の仕事は長くは続かなかった。3ヶ月くらい勤めて、辞めて、また雇ってもらおうというような感じだった。実際、若い人で警備員の仕事が長続きする人は少なく、長続きするのは、定年退職をしたおっさん（爺さんに近い）だった。それでも、とにかく仕事をしてお金を稼ぎたいという人にとっては、いい仕事といえる。満18歳以上で、

役所が発行する身元証明書さえあれば、たいてい雇ってくれる。身元証明書は役場などで発行してもらえるのだが、普通の人は発行してもらえない。ただ、前科、破産、成年後見をうけている等の事情があれば、発行してもらえなかったと思う。私が思うに、警備員は、各地の公安委員会に届けねばならないので、身元証明書が必要なのだと思う。

また、時々、女性の警備員さんを見かけることがあるが、私としては非常に心が痛む。女性にとっては、男性の想像を絶するくらいハードな仕事だと思う。まず、日焼けだ。夏はもちろんのこと、冬でも日焼けする。一日中、直射日光を浴びるということは、女性の美容にとっては、最大の問題だと思う。日焼け止めを塗ったり、日よけをかぶったりしていても、日焼けを完全に防ぐことは難しいと思う。もうひとつは、トイレの問題だ。男性だったら、いざとなったら、たちしょんすればよいが、女性の場合はそうはいかない。私のいた会社では、女性は、近くの家でトイレを借りるようにとのことであったが、それはそれでいろいろ難しい問題があるとおもう。とにかく、女性にとってはハードな仕事であると思う。家族のため、生活のために、やむなく働いているのかと思うと、切なくなる。同情ではなく、畏敬の念である。私の40年の人生の中で感じたことは、女性は強いということである。男性よりもはるかに強いし、ありとあらゆる面において、女性のほうが、男性よりも優れていると思う。唯一、男性のほうが優れていると思うのは、腕力である。腕力以外は女性のほうがはるかに優れていると思う。とすると、腕力のない男は・・・ということになるが。

それから、だんだんニートになってきた。

ニート時代

警備員の仕事が長続きしなかったのも、それからニートに突入した。

親からお小遣いをもらいながら、毎日ぶらぶらしていた。30歳を過ぎた頃だ。

一応は、ハローワークへ毎日通っていたのだが、別に本気で仕事を探す気がないので、

「へえ、今はこんな仕事があるのかあ。」

などと、暢気なものだった。そして、自販機で缶コーヒーを買って、喫煙コーナーでタバコを一服。それで、なんとなく自分が仕事をしているような気になっていたから不思議だ。

しかし、そのうちハローワークに行く振りをして、海までドライブしていた。途中のコンビニで、タバコ、缶コーヒー、チョコレートを買って、海辺の公園でくつろいでいた。今思えば、この頃、思い切って仕事をしていればよかったのだが、はっきり言って、本気で仕事をする気など全くなかった。仕事をする自信がなかったし、

「今更就職したって、ろくな仕事はないよなあ。」と、諦めムードだった。まだ、30歳を過ぎたばかりだったので、その気になれば、それなりの仕事にありつけたと思うのだが、その頃はそれに気づかなかった。

そのころ、毎日のように行くコンビニの女性店員さんに恋をしていた。小柄で、優しそうな感じの娘だった。しかし、私は無職。女性に対して、声をかけることなど出来なかった。今では、そのコンビニにはなくなって、ほか弁屋になっている。あの娘はどうしているのかなあ……。真心ブラザーズの曲を聴くと、必ず彼女のことを思い出す。きっといい奥さんになっているんだろうなあ。

なぜだかこの頃、やたらと音楽CDを買いまくっていた。毎日のようにCDショップにいき。特に洋楽CDを好んで買っていた。自分の部屋で、ベッドに寝転がって、音楽を聴く。それが日課となった。60年代のブリティッシュロックをやたらと聴いていた。特に、エリック・クラプトンをよく聴いた。30過ぎて、洋楽に目覚めるのも何か変だが、とにかく聴きまくった。

邦楽では、ZARDをよく聴いた。というよりも、毎日聴いた。それは10年以上経った今でも続いている。坂井泉水さんが亡くなった時には、三日泣いた。その後3ヶ月は、ZARDの曲を聞くと泣いていた。私以外にもそんな人は多いのではなかろうか。彼女は、理想の女性像だ。ご冥福をお祈りいたします。

また、この頃、寝酒をする癖がついていた。親に隠れて、ウイスキーを買ってきて、夜中に飲んだ。夜中に、好きな音楽を聴きながら、酒を飲む。心地よかった。なんか、アル中になりそうな気がした。まあ、ならなかったけど。

このころ、高校時代の友人のと、しょっちゅうドライブに行っていた。その友人もニートで（しかも、大学を中退して、精神病院に入退院を繰り返していたという過去を持つ男、まあ簡単に言うと私と同じキ○ガイだった。）、ニート同士気楽にやっていた。思えばこの頃が一番気楽だったのかもしれない。まあ、親には相当迷惑をかけたが。また、ニート時代に、母親が、パソコンを買ってくれた。パソコンくらい使えないとね、という親心だ。やっぱり親は有難いものなのだ。買ったのは、NECのLavie Cというノートパソコンだった。初めて電源を入れたときは、正直いって感動した。

「こ、これがパソコンというやつか・・・。」といった感じだった。

まあ、OSがWindows Meだったので、フリーズしまくりで、

「パソコンって、こんなに面倒くさいのか・・・。」と思ったりもしたが、初めてインターネットに接続したときは感激した。光回線が当たり前の今とは違い、電話回線のダイヤルアップ接続だったので、画像が上のほうから、ゆっくりとコマ送りのように表示されていたのだが、今となってはいい思い出である。

当然のように、エロサイトばかり観ていた。しかし、まだ、動画ではなく、写真が一般的だった。それでもけっこううれしかった。そんなことをするよりも、officeソフトの練習や、プログラムの勉強をすれがよかったのだが、当時はそんなことは思いつかなかった。

世間一般の人は、ひきこもりと、ニートを混同しがちだが、両者は全く異なる。経験した人なら解ると思うが、引きこもりは、仕事や勉強をしたいと思っているが、精神的問題のためそれらが出来ない。しかも、やたらと苦しい（精神的に）。一方、ニートはその逆だ。仕事や勉強などする気がなく、親から金をもらって遊んでいる。しかも楽だ。

こうやってみてくると、私は現代の社会問題を、時代を先取りして経験している。（まあ、そんなこと時代を先取りする必要はないのだが。）私が引きこもりをしていた頃は、まだ、「ひきこもり」という言葉は一般的には使われておらず、私がひきこもりを脱出してから、新聞などでひきこもりの問題が取り上げられるようになった。ニートの場合も同じで、私がニートだったころ、ニートという言葉は聞いたことがなかった。

司法試験受験時代

ニート生活を2, 3年やっていた。そのうち、このままでいいのか？ という疑問が生じてきた。32, 3歳のころである。それで、何か仕事を探そうかとも思ったが、司法試験に再チャレンジすることにした。学生時代からの夢でもあったので、少し遅れはしたが、何としてでも合格しようと決意した。私としては、自然な成り行きのように思えた。

朝は5時から、夜は12時まで勉強した。とにかくすべてのエネルギーを、司法試験の受験勉強に注ぎ込んだ。毎日毎日、とにかく勉強した。それでも、1年目は、択一試験すら不合格だった。まあ、そう簡単に合格するとは思っていなかったなので、その結果は受け入れることが出来た。結果発表当日から、次の年の試験に向け勉強を開始した。

それからしばらくして、私の精神が変調を来した。

近所のおばさんの話し声がやたらと気になるようになった。自分の悪口を言っているのではないかと思うようになった。そして、なぜか、やたらといたずら電話がかかってくるようになった。

私の精神は崩壊してしまった。

精神病院入院

司法試験の受験勉強に疲れ果てた私は、はっきり言って、ノイローゼというか、神経衰弱
というか、とにかくやたらと物音に敏感になって、過剰反応し、日常生活が困難になっ
た。家にいると、物音が気になって、気が狂いそうになったのだ（まあ、気が狂ってい
たわけだけど）。

私は、通院していた国立病院に入院することを決意する。しかし、国立には入院できな
かった。主治医が紹介状を書いてくれて、市内の某私立病院に入院することになった。そ
のことに関しては、「ぼくは電波系」で書いているので、ここでは詳しくは書かない。

とにかく、3ヶ月入院した。しかし、症状が改善したか、というと、そうではなかった。
実家に帰っても、物音にびびりまくるといふ、異常な精神状態のままだった。

それで、当時、（10年位前）父親が、県外で仕事をしているので、父親を頼って、彼の
マンションで生活することになった。実家から、高速道路を車で飛ばして、5時間半く
らいかかった。

県外の父親のマンション時代

そこは、海辺に面した地方都市だった。見晴らしのよい高台に、父親の所有するマンションはあった。マンションのベランダからは、きれいな海を見渡すことが出来た。最初は、あたかも、フランスのニースあたりにバカンスにでも来たかのような気分だった。まあ、それも最初の1週間くらいだけだったが。

マンションでの生活に不満はなかった。それどころか、実家は田舎にあるので、少しでも都会的なところで暮らせることが楽しかった。東京とは程遠いが、なんとなく東京での生活を思い出させるものがあった。

精神的には、かなり楽になった。もう、それほど物音に敏感にはならなくなった。しかし、そこでの生活は、決して正常な生活であったとは言いがたい。

朝は5時半くらいにおきる。(父親がおきるから。)7時ころ、父親が仕事に出かける。そして、父親が家を出るのを見送った私は・・・眠る・・・しかも12時頃まで。そして、12時に昼ごはんを食べて、また寝る・・・夕方まで。そして、6時過ぎに父親が仕事から帰ってくる。そして、夕食を食べ、風呂に入り、テレビをみて12時頃寝る。これの繰り返しだった。つまり、一日のほとんどの時間を寝ていたのだ。まるで、寝たきり老人のようだった。

今考えても、よくもまあ、あんなに眠ったなあというところだ。薬のせいなのか、それとも、脳が睡眠を必要としていたのか？ 今となっては謎である。

今思えば、このころ何でもいから思い切って仕事をしていればよかった、と思う。もっと違った人生を歩めたのかもしれないが、今となっては後の祭りである。

私がそのころ唯一、社会と関わり合っていたのは（まあ、社会と言えるかどうかは疑問がだ。）地域生活支援センターという、精神障害者の人たちのための施設に、時々通っていたことである。そこで、別にたいしたことはしなかったが、二人の友人が出来た。

一人は、Aさん（仮名）。彼は、私より1歳年上で、O大工学部卒の一級建築士だった。ルックスは、猿岩石の有吉に似ていて、品の良い、二枚目のインテリと言った風貌だった。そんな彼は、統合失調症だと言っていた。建築事務所に勤務していたころ、仕事のしすぎで発症したらしい。彼は極めてまともな常識人で、どこが精神病なのか解らなかった。彼とは、大学時代の話や、仕事をしていた頃の話で盛り上がった。お互い似たような境遇だったこともあり、シンパシーを感じた。二人で、喫茶店に行ったり、洋服を買いに行ったりした。

もう一人は、Tさん。彼はもともとは鉄道関係の仕事をしていたらしかった。彼は人格障害だと言っていた。人格障害、時々聞く言葉だが、不思議な言葉だ。人格に障害があるって、いったいどんなことなんだろう。彼は私より2, 3歳若かったので、当時、30歳くらいだったのだろうが、最初彼を見たときは、70過ぎのおじいさんだと思った。

二人ともいい人だったので、時々コーヒーを飲みに行ったりした。こういう感じで人生をエンジョイするいきかたもあるんだなあ、等と感じていた。今となっては非常に懐かしい思い出だ。彼らとはその後、全く連絡を取っていないが、二人とも元気になっているのだろうか。

父親は、私が社会復帰することを願っていたので、いろんな意味で役に立つだろうということで、パソコンを買ってくれた。Windows XP 搭載の、シャープのノートパソコン・メビウスだった。私にとって、2台目のパソコンだった。

最初のパソコンは、ニート時代に母が買ってくれた、NECのノートパソコン・Lavie Cだった。初めてのマイ・パソコンだったので、電源を入れて、Windowsが立ち上がったときには、なんだか感動した。しかし、OSがMeだったので、フリーズしまくりで、パソコンってこんなに不便なのか・・・と思わせる代物だった。しかし、Windows 9 5で大騒ぎしている頃、欲しくても買えなかった私にとって、初めてパソコンを手にしたということは、大きな出来事だった。

話がそれた。私は、父親が買ってくれたパソコンで、ネットばかりみていた。そのころ、

もうブロードバンド接続していたので、ダイヤルアップの頃とは大違いだった。このころ、もっとパソコンを活用しておけばよかったのだが、私はただネットサーフィン（死語）するだけだった。しかし、いい暇つぶしにはなった、というか、現実逃避が出来た。

こう考えると、やっぱり親って有り難いものなんだなあ。だって、他人がパソコン買ってくれるなんて、普通ありえませんか。

なんだか、無駄に日々を過ごしていた私だったが、ひとつだけ救いがあった。それは、父親が山登りが好きだったので（まあ、素人でも登れるような山にしか行かなかったが）、毎週のように、どこかの山へ登山に行った。私は、そんなに山登りに興味があったわけではないが、きついながらも、山頂まで登ると気分爽快だった。山の頂から、素晴らしい自然を見渡しながら食べる弁当は、格別にうまかった。

また、親父は、健康のため、毎日1時間くらいのウォーキングを日課としていたので、それにも私はつきあった。めんどくさいなあ、などと思うこともあったが、体を動かすことは、ストレス解消になり、精神を安定させる効果があるので、私としてはけっこうためになった。

半年ほど、そこで過ごした後、また実家に戻った。しかし、それは賢明な判断ではなかった。

精神障害者施設入所

実家に帰った私は、それまで落ち着いていた症状がぶり返してきた。また、やたらと物音が気になり始めたのだ。はっきり言って、気が狂いそうだった（本当に気が狂っていたのかもしれない。というか、狂っていた。）。それで、どうしようもなくなって、県立の精神障害者施設に入所することにした。なにも、そこまでしなくても、と、今になってみれば思えるのだが、その頃は、物音が気になって、家にいることは不可能に近かった。また、父親のマンションに行きたいと思ったのだが、父親にくるなといわれた。それで、やむなく、精神障害者施設に入所することにしたのだ。はっきり言って、家以外に行けるならどこでもよかった。当時の私だったら、たぶん刑務所にでも喜んで入っただろう。

だが、精神障害者施設にはすぐには入れなかった。なんと、順番待ちしなければならなかった。精神障害者施設に入所するのを、順番待ちする？ 精神障害者ってそんなにたくさんいるのか？

「いったい、世の中どうなっているんだ！」

私が言うのもなんだが、実際そう思った。芥川龍之介は「しゅじゅの言葉」（しゅじゅが漢字に変換できなかった）のなかで、確か「人生とは、狂人が主催する競技会のようなものなので、だれも無傷ではいられない。」というような意味のことを書いていたと思うが、私もなんとなく解かる気がした。また、私の学生時代、1980年代後半に、スペイン映画ブームというのがあって、その中のひとつに（実際には予告編しか見てないし、タイトルも忘れたのだが。）、ある国に、外国の軍隊が攻め込んできて、たまたまそれに出くわした精神病院入院患者たちが、武器を手にして外国の軍隊と戦う、というような映画があった。その映画は、何が狂気で何が正気なのかを世に問うているような感じの映画だったと思う。私も、何が狂気で何が正気なのか、現代社会ではもう一度考えてみなければならないのではなかろうか。（まあ、私が言うのも何なんですけどね。）

とりあえず、入所できるまで、精神科のデイケアに行くことにした。精神科のデイケアは、けっこう楽しかったのだが、（みんな言い人だったから楽しかったといったままで、決して心から楽しいと思えるような精神状態ではなかった。）そのときの私の精神状態は

最悪であった。言葉でどう表現すればいいのか解からないが、相当なうつ状態で、なおかつ神経過敏で神経衰弱で、いっそのこと死んだほうが楽だった、とでも言うておこう。まあ、簡単に言うと、狂っていた。

しかも、デイケアは保険の適用外だったので、実費負担となり、一日数千円もかかった。(まあ、お金はすべて親にもらっていたのだが。)まったく、何がなんだかわからない状況だった。本当に生きた心地がしなかった。

そうこうするうちに、精神障害者施設に入所できる日がやってきた。確か、3ヶ月くらい待った。私は、やっと精神障害者施設に入所できるということになったので、これで自分もなんとかなると思った。そんなことを思うこと自体どうかしていると思うのだが。

しかし、その精神障害者施設は異様な雰囲気だった。そこに入所している人たちは、はっきり言ってまともな人たちではなかった。はっきり言ってみんな狂っていた。まあ、だからこそ、精神障害者施設に入所しているのだろうか。

入所の初日に、入所者全員が集まった食堂で自己紹介があった。私は恐る恐る自己紹介した。その時、若い女性入所者の一人が、大声でげらげら笑い出した。そして、自己紹介した後もまだ笑っていた。あの女は間違いなく狂人だった。数日後、その女は精神病院に逆戻りしたという話を聞いた。あんな女は、精神病院でも厄介者だろう。とにかくそこは、精神異常者のオンパレードだった。もちろん、私も含めて。

精神病院のほうが、まだまともだった。そこでの日々は、詳しくは書かないが、私にとっては地獄のような日々だった。私の人生の中で、最悪な日々だった。当時私は、かなり強めの精神安定剤のようなものを飲んでおり、はっきり言って廃人同然の生活を送っていた。一日中、施設の部屋にこもり、布団の上でのた打ち回っていた。(刑務所の囚人のほうがよっぽどまともな生活をしていたと思う。)

まあ、念のために言うておくが、その施設から社会復帰した人もけっこういるのであろう。というのは、最近(ネットでみただけだが)その施設は、かなり立派な設備を備えた施設に生まれ変わっているからである。何の成果も上げていなければ、県の予算が通らないであろう。まあ、通るんでしょうけどね……。

しかし、私が見聞きしたところでは、半年か、1年サイクルで出たり入ったりしている人のほうが多い。そこの住人といったほうが適当かもしれない。そこでは、狂った奴が幅を利かせている。狂っていれば狂っているほど偉い、的なの、訳のわからない力関係が存在していた。

「まったく、こんなところにいるくらいなら、死んだほうがましだ。」

そんな感じだった。

それで、親に、

「何とかここから出してくれ！」

と頼んだのだが、

「だめだ！ お前が自分から入ったのだから、しばらく我慢しろ！」

と、そっけなかった。

しかし、私はどうしても耐えられなかったので、親に頼み込んで、1ヶ月で出してもらった。しかし、無条件で出してもらったのではなく、50日以内に、何でもいから仕事を見つける、ということと、風呂の掃除をするということが条件だった。

そのときの私は、精神障害者施設から出るためだったら、どんな条件でもものんだだろう。たとえそれが人殺しであったとしても。

それから、私の仕事探しが始まった。

仕事探し

精神障害者施設を出て、実家に帰った私は、とにかく何でもいいから仕事を探すことにした。精神状態は、おせじにもいい状態とはいえなかったが、あの精神障害者施設にいるよりはずっとましである。

とにかく、求人誌を買って手当たり次第に面接を申し込んだ。たしか35歳の夏のことだった。気持ちばかりあせて、なかなか仕事は見つからなかった。

「学生時代は、一流企業のほうから、うちに来て働かないかといわれてたのに・・・とほほ。」

そんなことを考えていたが、バブル崩壊から10年以上たっても、いっこうに景気はよくならず、新卒の学生ですら就職するのが難しい時代である。自分に、そう簡単に仕事が見つかるとは思ってなかった。

そのうち、何とかバイトが見つかった。農業資材を作る会社であった。私としては、もうどんな仕事でもよかった。とりあえずは仕事が見つかったので、精神障害者施設に強制送還されることはなくなった。しかし、そのバイトは、予想以上にきつかった。ビニールハウス用のビニールを、機械を使ったり、人力でたたんだりする仕事だった。久しぶりの仕事だったので（しかも肉体労働）、体のあちこちが痛かった。特に、腰が痛くなって、腰が立たなくなったりした。それでも何とか続けていたのだが、ビニールを折りたたむ機械で、右手の小指を少し挟んで怪我をした。それがもついで、そのバイトはやめることにした。たった2週間くらいしか続かなかった。

しかし、久しぶりに仕事をしたという充実感とがあり、また、そんな私のがんばる姿勢を両親も評価してくれた。それで、精神状態は格段によくなった。こう考えると、やっぱり何らかの仕事をしているほうが精神的にはよい、ということが解かる。前にも述べたが、引きこもりや精神的問題を抱えている人は（まあ、仕事が見つからない人は別だが）、

精神科にかかったうえで、何らかの仕事をするのが、自分の抱えている問題を解決し、社会復帰の糸口となると思う。

人によっては、仕事をするのが難しい方もおられると思うので、無理に仕事をする必要はないとも思う。しかし、体が動くのであれば、何らかの仕事することは、どん底から脱出するにはよい方法だと思う。少しはお金も稼げるし、少しずつ体力もついてくる。いやだったら辞めればいい位の気持ちで、いろんなことにチャレンジしてほしい。私も、怖かったが、清水の舞台から飛び降りるつもりで仕事をした。長くは続かなかったが、派遣社員、ブラック営業、配達、リサイクルドライバーなど、数え切れないくらいの仕事をした。何度もばっくれたが、いい経験になったし、何もしないよりは、全然ましである。他人にもまれることによって、家族のありがたさが、身にしみてわかってくる。

今日に至るまで

それから、今日に至るまで10年近い日々が経過している。こうやって見て来ると、ああ、自分はでたらめな人生を送ってきたのだなあ、われながら感心する。私のような人生を送っている人が他にもいるのだろうか？ いたら友達になりたいものだ。

しかし、先日某NHKで、新型うつ病のことをテーマにしている番組をみた。まあ、私は素人なのではっきりとは解からないが、新型うつといわれている人たちと（まあ、そういう人たちは20代の若者なのだが。）私は、奇妙な共通点があることに気づいた。例えば、ちょっとしたことで仕事を休んだり、辞めたり、職場の人たちを逆恨みすることなどである。そして、それらの原因は、親子関係にあるとのことだった。それも私に当てはまる。そういう人たちは、以前から少なからずいたのであろうが、最近になってクローズアップされはじめた、というところではなかろうか。それが正しいとすれば、親子関係から見直さなければならぬことになるが、40過ぎて親子関係を見直すって、いったいどうすればいいのだろうか？

まあ、確かに親子関係に問題があるのであろうし、その問題は解決すべき問題なのだろうが、40歳過ぎた今となって、何でもかんでも親子関係のせいにしてばかりはいられない。私は、仕事を変えるたびに、定期的に（特に季節の変わり目）に情緒不安定になり、訳のわからないストレスを抱え込んで、親子喧嘩をするのだが、冷静に考えると、本当に両親に対して申し訳なく思う。過去にいろいろあったとしても、40過ぎてても親の世話になりながら生活しているのだから、両親には感謝しなければならない。それが嫌ならば、家を出て行けばよいのだが、それだけの経済力がない。だから、親の世話になっているというわけである。だから、やはり両親には感謝するべきであると思う。まあ、それは私の場合だが、ひきこもりやニートは、普通は、一人暮らしでできるだけの経済力がない場合がほとんどだと思われるので、両親の世話になっている場合には、やはり感謝するべきであろう。両親に感謝する気持ちがあるときは、気持ちが軽くなる。逆に、両親や家族を恨んだりしているときには、精神的に参ってしまう。

仕事には就くものの、長続きがしない。職を転々としている。現在43歳であるので、なかなか思うような仕事にはありつけない。（まあ、当たり前だが。）とりあえず、当面の

課題は、何でもいから仕事を探して、それを長く続けるということだ。それと、以前は、司法試験などやたらと難しい試験を目指していたが、これからは、合格できそうな資格（行政書士、宅建等）を取得して、仕事の役に立てたいと思っている。

参考になるかどうかかわからないが、私は38歳の時、思い切ってバイクの免許を取った。高校時代、空前のバイクブームを経験したが、学校では禁止、両親も大反対だったということで、断念していたのだ。しかし、車をRV車に買い替えたのをきっかけに、とにかくバイクに乗りたくてたまらなくなった。それで、思い切って取ったのだ。10万円くらいで意外とあっさり取ることが出来た。バイクを買うお金までは用意できなかったもので、親に出してもらい、12万円の安い中古のバイクを買った。しかしこれは、私にとって大きな意味を持つことになった。確かに、バイクは車と違い、ルールを守って、マナーよく乗らないと、場合によっては命にかかわることになる。しかし、バイクで走っている間は、本当の意味で、生まれて初めて自由を感じた。それまで、自分で何かを決めて実行することはなく、親の言うとおりにしていたのだが、このときばかりは独断でやった。親に相談せずに、自分だけで決めて実行したことは、これが初めてだった。バイクで走ると、日ごろの悩みなど忘れてしまう。（すくなくとも、バイクに乗っている間は。）もし興味があれば、バイクに乗るのもいいと思う。しかし、車の場合は、物損ですむところが、バイクの場合、即死、ということもありえるので、自己責任でやってほしい。必ず、ルールとマナーを守っていただきたい。

話が前後するが、私が借金を作って、それを親に払ってもらったことも述べておかねばなるまい。

なんとか仕事をしているうちに、しだいにストレスが溜まっていった。そのはけ口を、カードショッピングなどでお金を使うことに求めてしまった。一度カードを使うと癖になり、総額150万円くらいの借金を作ってしまった。5年間くらい借金の返済をし続けていたのであるが、借金は一向に減らなかった。それで、やむなく親に泣きついて、弁護士の先生に頼んで、借金を清算してもらった。やはり親は有難いものである。

なるべくならば、カードショッピングやネットショッピングは慎むべきである。経験者が言うのだから間違いない。

まとめ ひきこもり等について思うこと

最後に、まとめとして、ひきこもり・ニート・イジメ・精神病などが、なぜ私の人生の舞台に登場したのかを考えてみたい。これらのことの原因は、主に親を中心とした家族との人間関係が原因であると思われる。世間体を気にして、劣等感の強い、支配的な親は、子供を自分のコントロールの下に置こうとする。そして、子供に、無理難題を押し付け（それは、親自身の劣等感を解消することと、世間体を取り繕うことが主たる目的であると思われる。）、子供を自分の分身のロボットのように扱う。このようにして育った（育てられた）子供は、成長していく過程で、自分自身で物事を判断したり決断したりせず、親のしいたレールの上を、おやが決めたように歩いてゆく。そのようにして大人になった（本当は、大人とはいえないのだが）人間は、自分で物事を決めたり判断したりすることに自信が持てずに、対人関係で苦しむことになる。そしてそれが原因で、ひきこもり・ニート・精神病になりやすくなると思われる。

それらの親は、世間体を気にして、自分の劣等感を解消し、子供を自分の思うように作り上げ、満足しようとするのだが、結果的には、それらのことが、全く逆になって、親自身に襲い掛かってくることになる。

私の尊敬する偉大なる刑法学者、団藤重光先生は、刑法総論の責任論において、

「素質と環境に制約されながらも、自らの主体的な努力によって、その人格を形成したことに、責任の所在がある。」

というようなことを述べられており、私もそのとおりだと思うのだが、「自らの主体的努力」が、あまりにも親の影響を受けていると、それは自由意思ではなく、親にコントロールされた意思によっての努力になってしまうような気がする。

上記のようなことを、20年近く考えていた私であったが、最近になって考え方が変わった。というのは、私が、何か悩んだり、うまくいかないときには、かなり自己中心的になって、回りの人たちに対する感謝の念を忘れていることが多いからだ。中学時代や、裁

判所時代にイジメに合ったのは、今考えれば、私自身がかかなりわがままで、自己中心の
だったからだと思われる。(別に、これはイジメを肯定しているわけではない。) わがま
まで自己中心的な人を好きな人はあまりいない。

また、ひきこもりや、ニートのときは、自分の失敗を親の責任にして、自分は親の犠牲
になったのだ、などとかかなり自分勝手なことを考えていた。両親をはじめとする家族に
対する感謝の念を無くしていたのだ。感謝の心をなくすと、自分自身が苦しくなる。こ
れを、逆に考えれば、自分自身が苦しいときには、両親や周りの人たちに対する感謝の
念を忘れていくということになる。ということは、両親や周りの人に対して感謝する心
を持っていけば、苦しくなくなるということである。これは、私の実体験からもいえる
ことである。

いま、ひきこもり、ニートなどで苦しんでいる人は、両親や周りの人に感謝することから
はじめていくのがいい方法だと思う。両親や、周りに人に感謝できているときには、精
神的に安定していて、幸福感を感じる。これは、私だけではないと思う。

大体、ひきこもり、やニートが成立しているというか、それでも生きていけるというこ
とは、両親や家族に世話になっているということである。私の場合そうであるし、他の
ひきこもり、ニートの人たちもそんな感じではなかろうか。とにかく、両親に感謝する
ことから始めよう。

近況

最近仕事を始めた。楽な仕事ではないが、楽しくやりがいがある。

仕事をしていて、思い返すのだが、やはり親や家族というものは有り難い存在である。親に対して申し訳ないと言う気持ちで一杯である。何とかして親孝行をしたい。苦勞をかけた分、これからは両親および祖母に樂をさせてあげたい。

仕事をしながら、行政書士の資格取得に向けて勉強している。また、LinuxとUnixの勉強も始めた。何でも出来ること、やりたいことはやって、自分自身を向上させていきたいと思っている。

とにかく、仕事にせよ勉強にせよ、諦めずに続けていきたいと思っている。

それから3ヶ月くらい経過した。行政書士の試験はなんとか受けた。仕事で疲れており、風邪までひいていたので、コンディションとしては、決していいものではなかったが、なんとか3時間頑張った。ネットで自己採点してみたら、ボーダーライン上といったところだった。しかし、全力を出し切ったので悔いはない。

今は、仕事は休みをもらって、ファイナンシャルプランナー3級技能士の試験に向けて勉強中である。初めて勉強する分野なので、難しくもあり、新鮮で面白くもある。

LinuxとUnixに関する勉強は、一時中断して、コンピューター一般の勉強をしている。というか、コンピューターに関する本をブック〇〇で買って、読みまくってるだけ。

それに、こころに関する本を読んでいる。いろいろと反省することが多い。自分自身を磨き、真っ当な人間として生きていきたいと思う。

行政書士試験は不合格であった。まあ、それはそれでよいでしょう。今年は合格だ。

FP3級も受けた。しかし、試験問題が事前に、HP上から漏洩していたということなので、いったいどのような措置がとられるのであろうか。まあ、私は、おちて当たり前と

思って受けたので、なんとすることは無いが、この試験のために一生懸命頑張ってきた人も大勢いると思うので、その人たちはショックだろう。

ここで、ハローワークで経験した事を書いておきたい。

仕事は、なかなか長続きしなかったのが、ハローワークにある、福祉の窓口で相談を受けていた時期があった。もちろん、精神科に通っていることなども全て話した。私は、正直に、自分の現状を話した上で、これから仕事を探そうと思っていた。

しかし、これは意外な結果を生ずることとなった。それは何かと言うと、精神科に通っているということを話してから、窓口で、仕事を紹介してくれなくなったのだ。もちろん、表面上は、いろいろと、先方の事情で女性を採用したいとのことなので、あるいは、あなたの自宅からは遠いので、などともっともらしい理由を言われる。しかし、精神科に通っていると言うまでは、窓口で、求人票の会社に電話してくれていたのだが、精神科に通っていると言ってからは、求人票を持って行っても、電をすらせずに、ここは、女性しか・・・等と言って、門前払いされてしまう。

まあ、これが日本社会の現状である。差別をなくそう、偏見を持つのはやめようという人々がいるが、精神科に通っていると言っただけで、ハローワークで仕事を紹介してくれなくなることもあるということである。つまり、精神科に通っているということは、絶対に言ってはならないということである。少なことも、ハローワークでは話さないほうが良い。

奥付

ひきこもり男の回顧録

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
